こんにちわ

言ってみる

たんがわ日和

おしゃべり相談会・勉強会

報告書

絵：安藤信重

えんがわ日和（びより）

おしゃべり相談会（そうだんかい）・勉強会（べんきょうかい） 報告書（ほうこくしょ）

こんにちわって言ってみる

2 えんがわ日和について ココルーム事務局

6 8名のえんがわ講師へ質問をしてみました

7 伊田広行（ユニオンぼちぼち 執行委員）ー労働問題ー

11 原口剛（地理学者）ー地域再考ー

14 倉田めば（大阪ダルク センター長）ー薬物・アルコール依存問題ー

18 椎名保友（パーティ・パーティ 職員）ー障害者支援ー

22 山下裕子（子ども情報研究センター 事務局長）ーこども・こそだて支援ー

25 高見一夫（Aワーク創造館 館長）ー就労支援ー

28 尾久土正己（天文学者）ーつながりの創造ー

31 木原万樹子（弁護士）ー法律問題ー

34 釜ヶ崎Q&A

37 コラム：ありむらさんのカマやん4コマまんが

38 えんがわのおしゃべり紹介

44 コラム：闘う人類学者 岡本さんのえんがわコラム

52 わたしたちは えんがわ でなにを感じ・考えたのか

52 カタストロフのなかで「えん（縁／円）がわ」を思う　えんがわ日和スタッフ　熊本拓矢

54 えんがわに腰かけて、風のることばに耳すます　えんがわ日和コーディネーター　原田麻以

56 でもさ、ちょっとだけ素直になれたらいいとおもうんだ　NPO法人ココルーム代表　上田假奈代

58 えんがわ事業データ

えんがわ日和について

～こんにちわ って 言ってみる～

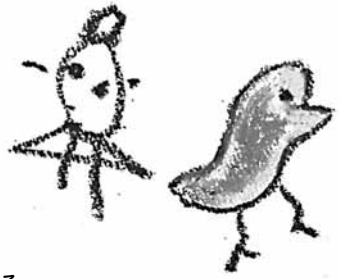
こんにちわ。

わたしたちは、ＮＰＯ法人こえとことばとこころの部屋（通称ココルーム）という団体として、大阪市西成区にある、通称釜ヶ崎という地域でインフォショップ・カフェ ココルームとカマン！メディアセンターを運営しています。ココルームは、社会的な課題に対しアートという切り口から関わっていくことができないか日々模索しながら活動しています。

２つの施設は商店街の路面店で、毎日、毎日シャッターを開けるとさまざまな人の訪れがあり、さまざまなおしゃべりが生まれ、ふとした相談事や心配事、気になることなどが、ぽろりぽろりとはなされることがあります。

しかし、アートのＮＰＯとして活動するわたしたちは、そういった出来事に対し直接的に何か役に立つ技術をもっていず、ともかく話を聞き、関わり、他の機関を紹介したり、他の人のところへつないだり…というようなことをしてきました。

そうした中で、困ったことがあっても、それをどうしたらいいのかがわからない、という状況に置かれている人がたくさんいることに気が付きました。そもそも、何に困っているのかもわからない。わかったとしても、どこへ行ったらいいのかがわからない。専門の機関にもたどりつけず、自分の抱える問題の整理さえむずかしい状況。それは、日常の中で気軽に自分の感じていることをはなす場が少なく、悩みを相談できるネットワークもなく、抱えているものを解決するためのスムーズなルートに乗ることがとてもむずかしい状況にあるということなのだと思います。専門機関と日常を生きるひとりひとりとの間にある関係を、えんがわのおしゃべりで編み直すことができないだろうか…。



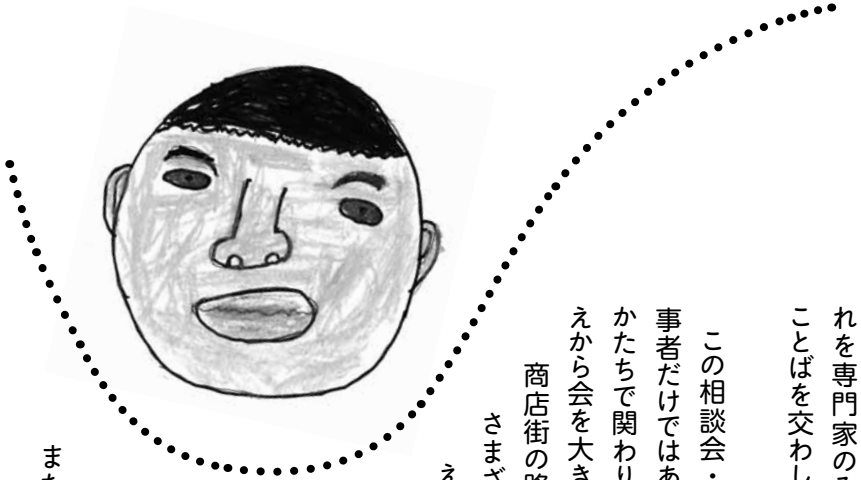
そんな問題意識の中で、わたしたちは、「えんがわ日和のえんがわおしゃべり相談会・勉強会」（うらのなまえは釜ヶ崎分野横断的ネットワーク事業）と題して、年間20回の相談会、勉強会を行ってきました。この会では、「法律問題」「つながりの創造」「薬物・アルコール依存問題」「障害者支援」「こども・こそだて支援」「労

働問題」「就労支援」「地域再考」という8つの異なる分野を設け、それを専門家のみなさんが分け持ち、それぞれの会で肩の力を抜き、ことばを交わし合いました。

この相談会・勉強会が対象としているのは、問題に直面している当事者だけではありません。誰もがさまざまな問題や課題になんらかのかたちで関わり、いつでも問題に直面しうる可能性がある、という考えから会を大きく外に開いてきました。

商店街の路面店でガラス張りという、建物の特徴も活かしつつ、さまざまな人の訪れを釜ヶ崎という社会的課題を多くかかえる地域のなかで待ちました。

そのために、参加する人は、問題に直面する当事者、問題に興味関心のある人、支援者、当事者の家族や恋人、問題を乗り越えた人、その分野について勉強中の人、アートの文脈でその場に居合わせた人、ふらっと訪れた人など、生きる背景の全く異なるさまざまな人たちがあつまることとなりました。



また、20回の相談会・勉強会以外に、8つの分野の専門家同士が出会い、互いの活動について知り合う時間をもちました。今回関わっていただいた、8名の専門家のみなさんが多忙であり、スケジュール調整が困難だった経験からもわかるように、専門性が高まると別の分野との関わり合いやつながりをつくることはむずかしくなります。しかし、さまざまな問題は複雑に関係し合い、そうであるからこそ互いに関わり合うことで、創造的な営みや、より良い知恵や工夫が生まれ、それらが地域や社会のなかで役立つことが多くあると考えます。

そんな会の中で見つめられてきた、たくさんの出来事、わたしたち事務局が感じ考えたこと、講師のみなさんが感じ考えたこと、参加したみなさんから語られたこと・感じたこと、その場で持たれたかけがえのない時間。これらを、そこに居合わせた自分たちだけのものにするのではなく、社会に開き、この世界に生きるみなさんと考え合いたいと思いこの本をつくりました。

ココルーム事務局

8名のえんがわ講師（こうし）へ質問（しつもん）をしてみました

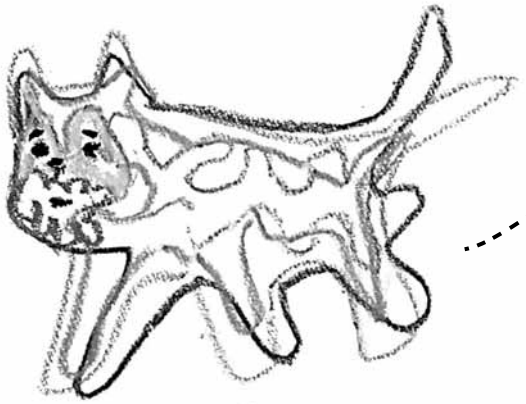
「ひとりで悩むより、えんがわのような場で、誰かと話してみましょう。」

そんなことばから、年間20回の相談会、勉強会を大阪市西成区にある、カマン！メディアセンターで行ってきました。

ふつうの相談会や勉強会とはちがう、すこし変わったこの企画をともに大事に考え、語り合い、参画してくださった講師のみなさん。

こんにちわ からはじめた関係から、いまみなさんがどんなことを思っているのか…。

8名の専門家「えんがわ講師」のみなさんに、事業のこと、ご自身のことなどについて、ざっくりとうかがってみました。



伊田（いだ） 広行（ひろゆき）

労働問題（ろうどうもんだい）

プロフィール

◎労働問題：伊田 広行（いだ ひろゆき）

立命館大学、神戸大学非常勤講師、立命館大学大学院先端総合学術研究科非常勤講師、「ユニオンぽちぽち」執行委員。

ジェンダー平等の観点をシングル単位論とした上で、それをベースに、家族にかかわる問題、デートDV、労働問題、ワーク・ライフ・バランス、貧困問題、自殺問題などに取り組んでいる。悩んでいる人や解雇されて行き場のない人たちの支援を、労働組合の団交、DV相談、生活保護取得や再就職支援という形で行っている。最近は男性相談、DV加害者相談も行っている。

著書に、『＜働く＞ときの完全装備――15歳から学ぶ労働者の権利』（共著・解放出版社）、『これからのライフスタイル』（大月書店）、『デートDVと恋愛』（大月書店）、『貧困と学力』（共著・明石書店）、『スピリチュアル・シングル宣言』（明石書店）、『シングル単位の恋愛論・家族論』（世界思想社）、『「まだ結婚しないの？」に答える理論武装』（光文社新書）ほか。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：相談というと、相談がくるのかなと思いましたが、いろんな分野の人がより突っ込んだノウハウをもっていてそれを話して、それを契機に新しいつながりや出会いがあるのはいいなと思いました。結果は、予想以上で面白かったです。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：労働問題では多くの人がひどい労働条件や労基法以下の状態にいるけれど、そのこと自体がわかっていない。わかってもなんともしがたいと思っているんだなと感じました。厳しい状況にいますよね。でも法律などやユニオンのことを知ると、そうなんだとか、もっと知りたいとか思います。もしものときに相談しようと、希望が出てきます。恋愛やデートDV（＊1）のことについて

えんがわ日和アンケート感想

- この勉強会の場に正社員の人がほとんどいない状態で、様々な雇用形態の人の話が聞けて、勉強になりました。
- みなが集中力をもって話をきいていて、よい会だったと思います。
- 労基法、組合について、知識が無いことの具体的な不都合を知ることが出来てよかったです。
- 知ることの大切さを知った。生きづらさを解消することが一貫したテーマだと感じた。

←←←←

は、わかっちゃいるけど難しいなあという反応や、世間は恋愛にとらわれすぎだけど、自分は実はそうじゃないよ～という感じがありました。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：今はお仕事をほとんど離れてフリーにやってます。そこに至るのは、社会全体を変えていきたいという思いから、徐々に、社会全体がなかなか変わらなくても自分はどう生きるのか、そこから始めるという風にシフトしてきたからだと思います。そこのところはまだまとめきっていないので、次の本に整理したいと思っています。

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：今のスタイルは、年をとる、経験を積む、ものが見えてくるという中で、次の課題、次の自分のスタイルを追求してきた結果の模索段階のものです。たぶん、常に「次」を探してきました。同じところでは面白くないから今のようなことをしているので、その意味でその模索自体が面白いのだと思います。「ちゃんと生きる」の追求という意味で面白いです。具体的には、具体的な個々人の「生きていく」ということの支援ができるとき、まあまあやれてるなと感じます。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください。

A：僕はまだ釜ヶ崎にかかわれていないと思っています。「ユニオンぼちぼち」の事務所があったり、夜回り・越冬（P36釜ヶ崎用語解説参照）したり、生保相談など少しはかかわっていますが、今後具体的な一人の人と深くかかわるなかで、釜ヶ崎という名を使えるかと思います。ただし、「ユニオンぼちぼち」などで模索している課題は、生活保護や失業や家族との切断や社会の周辺者といった意味で釜ヶ崎が取り組んできた課題と重なっているところが多分にあります。

- たのしかったです。また来たいです。
- 目が覚めました。
- 有給休暇の詳しい内容が知れて、勉強になりました。ありがとうございました。
- 知っているようで、たくさん知らないことだらけでした。次回も楽しみにしています。
- 私の今までの恋愛感と違うフリーな結婚に対する考え方。時代が変わってきたと感じた。
- 釜ヶ崎はひとりものが多いから、このひとりのひとたちが、それぞれになにか、家族がなくても人とつながっているという感覚がもてたらいいなあと思います。ありがとうございます。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：形になっていない星雲状態のところに何かを見出すそのセンスに面白さを感じます。多様な人をつなぐその直感。一つ一つを大事にする感覚。そういうのがいいです。僕としては、さまざまな相談というか、話をしあう、聞きあう場を持つ一つになればいいなと思い、それが可能性です。でも、他の人とのずれはある。あせって一挙に一つになる必要はないと思っています。場があり、継続があれば、見えてくると思います。「アート」というもののよそいきの意味じゃなくて、ひろい可能性を追求するところも魅力です。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：あらためて、他の人を見て、自分との違いを感じ、自分のスタンスを振り返り、自分に出会いました。僕がしたいのは、何なのか。どこを通ってここにいるのか。僕は、今を掘るようなことをしたい。横に広がるのではなく。

あと、原田さんや熊本さん（事務局スタッフ）などを「発見」しました。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：掘ることです。垂直に下りることです。丁寧になるということです。生活をちゃんと生きるということです。そういうことができれば、OKなんじゃないでしょうか。

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるで

しょうか…

A：ここで出会った人たちのところに出かけていきたいと僕は思っています。そしてつながる道が見えてきたら、めっけもんです。

◆　◆　◆

＊1 デートDV

恋愛関係におけるDV（虐待、支配）のことで、若者の恋愛においてよくみられる。

＊2 ユニオンぼちぼち

京都や大阪を地盤とした、一人でも入れる労働組合のことで、正式名称は関西非正規等労働組合。20～30代の非正規労働者や失業者が中心で、生存権を重視する新しいスタイルのユニオン。

原口（はらぐち） 剛（たけし）

地域再考（ちいきさいこう）

プロフィール

◎地域再考：原口 剛（はらぐち たけし）

地理学者。1976 年千葉県生まれ、鹿児島育ち。学部で哲学を専攻した後、2000 年より大阪市立大学大学院で地理学を学ぶ。現在は大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。釜ヶ崎の戦後史や野宿者の現状、都市論や社会・空間的排除論などについて研究をしている。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：「釜ヶ崎の思想を囲むつどい」（＊1）は事業に先行して自発的に開催されていましたので、違和感なく事業に位置付けられました。ちなみに「つどい」を始めた理由は、若者が釜ヶ崎と出会う場をつくりたい！という思いからなのでした。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：ケンカさながらの白熱した議論。さながら、というより、あれはケンカそのものでした。いやはや、緊張しました。釜ヶ崎で勉強会するって、こういうことなのね。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：就職したくなかったから。

えんがわ日和アンケート感想

- 一瞬空気がピリピリしたときもありましたが、その緊張感もこの会の面白さだと思いました。
- とても勉強になるが、情報が多くて自分でまとめきれない部分もあり、復習・反省会的なものがあるとありがたいです。
- 自分の生き方と考え方を皆の前で話せた事が良かった。
- 釜の日雇労働者として、廻りの人が語り、真剣に話をしてくれることがうれしい。

←←←←

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：尽きることのないナゾを解明したときの快感。「真実はいつもひとつ！」「心臓が息の根を止めるまで、真実に向ってひた走れ！それが刑事だ！」という言葉が心にしみます。それから、自分が解き明かしたことが誰かに伝わったときの感動。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください。

A：釜ヶ崎は世界とすぐにつながってしまうということ。世界と出会いなおす窓口としての、釜ヶ崎。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：おもしろさ。語り合うことで生まれる、思わぬ発見やことばの発明。

むずかしさ。一歩まちがえると、すぐケンカ（それも含めておもしろい、ともいえる）。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：アーティストや研究者もまた、寄せ場の労働者に近しい存在であるということ。それゆえ釜ヶ崎から学ぶことは、たくさんあるはずだということ。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：革命？

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：これは大学だ、釜ヶ崎大学なのだ、と、言いきってしまいましょうか。豪華なキャンパスがなくても、学びたい人と伝えたい人がいたら、それはすでにりっぱな大学なのですから。お金がなくてもここに行けば知に触れることができる、自由な表現がある、そんな場をつくっていけたら、とんでもなくおもしろいでしょう？

◆　◆　◆

＊1 釜ヶ崎の思想を囲むつどい

原口剛さんがコーディネーターをつとめ、釜ヶ崎の思想を囲みながら、さまざまな人が語り合う企画。釜ヶ崎で長年活動されてきた水野阿修羅さんが、「労務者渡世」という釜ヶ崎にくらしはたらく人たちの手でつくられていた冊子をカマン！メディアセンターに持ってきてくれたことに端を発する。２０１０年２月からほぼ毎月実施。

- 意見の重なりと同時にズレを面白く思いました。議論を継続する中で深めていきたいと思います。
- 釜ヶ崎に住んでいる人がもっと参加してほしかった。
- 釜ヶ崎のことを学ぶために来始めたが、自分の問題に気づいて考えるために使っている気がします。
- さまざまな意見が、本心から出てる思いが、聞ける場はすごくめずらしいと思います。
- 議論になりそうな時は、こわいかなとか思いました。素直に…。
- 多くの方の考え方、思いが違うので、喰い違う所は多くあるということが聞けてよかったです。
- 釜ヶ崎日雇労働者として自分の仕事にやっと誇りが持てるようになった。
- どうせ言いたい放題言う雰囲気だったら、最後まで方針かえずにそのままいってほしかった。
- 釜ヶ崎のルールとは、と考えることが出来ました。
- 緊張感がありながら、本音をかなり言い合える内容だった。
- いろんな問題があるけど、それをみんなで同じ目線で話し合え、実行していくことが必要だ。

倉田（くらた） めば

薬物（やくぶつ）・アルコール依存問題（いぞんもんだい）

プロフィール

◎薬物・アルコール依存問題：
倉田 めば（くらた めば）

大阪ダルクセンター長、Freedomコーディネーター、神戸学院大学学際機構客員教授。尾道市生まれ。大阪写真専門学校卒業後ヌード・カメラマンに。その後フリー。1993年、薬物依存回復施設「大阪ダルク」設立。ピア・ドラッグ・カウンセラーとして、薬物依存者のサポートを続ける。2001年より薬物関連問題の新たな社会資源を創出するための市民団体「Freedom」を支援者とともに設立。4度の精神科病院入院歴を持つ薬物依存当事者。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：ココルームやカマン！メディアセンターの活動は以前からとても貴重だと思っているので、どんな形でも協力ができたらいいなと思いました。えんがわおしゃべり会というネーミングが気に入りました。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：アルコール、薬物に問題がありそうなおじさんたち、家族やパートナーとの人間関係で行き詰っている方たち、生き方に困難を抱えておられる方など、各々自身の当事者性に直面している人たちとの言葉のやりとりの時間が印象的でした。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：一人の若い薬物依存者の死でした。昼間カメラマンの仕事をしながら、ボランティアで薬物依存の自助グループ（*1）の活動をしていましたが、仕事を優先して面会を先延ばしにして、その若者に会いに行ったら死んでいたのです。ボランティアでは間に合わない事がある ー そう思い、ダルク（*2）やフリーダム（*3）での仕事を生業とすることにしました。当時、スペイン、イタリアの薬物依存症の施設を見に行ったことも、ダルクを開設する動機に弾みをつけました。

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：1、自分自身の回復と成長の役に立つ。2、多くの薬物依存者やその家族とのやりとり。3、人間が楽な生き方をしていくための普遍的な道を知らず知らずのうちに歩んでいけそうな気がする 他にもいろいろ…。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください。

A：覚せい剤についていえば、密売人がそこらへんにいる場所では、なかなかやめていけないと思いました。覚せい剤をやめたいと心から望んでいる釜ヶ崎の薬物依存者に対しては西成を離れたところで生活支援を受け、トリートメントを受ける体制が必要だが、現実問題として困難さを感じます。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：「薬物依存者になってよかった」という道端の看板に誘われて、飛び込みで話を聞きに上がってきた若い人が2人いました。彼らは、映画に関わる活動をしている人で、後日、彼らが企画した映画の上映イヴェントによばれ、朗読とトークをしました。「えんがわ」という靴さえ脱げば誰でもアポイントなしで上がってこれる気安さが新たなつながりを生むんだなと思いました。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：最初の2回は、自分の話をして、短い残り時間で一言ずつ参加者のコメントを聞く程度でしたが、最終回は、参加者にできるだけ多くのいでいられそうです。

・今回は薬物依存についての話でしたが、病気としてとらえることで他の疾患を抱えている方にも役立てたり、どうしていいかが少しだけわかったような気がします。

・たくさんの人の話がきけるのはうれしい。

・薬が手に入り易すぎて目に余る事が有ります。

・自己尊厳、自己憐憫。それが問題なのは、わかっている。でも、そのことに関して、身近な人間は、いったい何を支えられるのだろうか…。

えんがわ日和アンケート感想

・依存症に完治がない事は、ある意味あきらめがつきました。

・一般的な場ではなかなか聞けない貴重な話がきけました。

・自分のアルコール依存の問題点と似ていることが話せて、ちょっと心の負担が軽くなった。

・雰囲気が良くて楽しかった。

・自分の経験と似ている所と、シンナーからはじまりすいみん薬遊び。今日の話をきいて自分も今現在やめていますけど、又やらな

時間、自分の話をしてもらうような時間配分に変えました。この方が、盛りあがりましたね。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：社会を変えようとする前に自分が変わることでしょう。皆で闘っても、日本は変わらないという諦念感が、若い世代の人にほど蔓延しているとすれば、若い人の感じ方はきっと正しいのです。でも、若い人たちも社会を変えようとする事には無関心でも、自分を変えることができそうな何かには積極的に振り向きそうな感じがします。

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：出張釜ヶ崎。

釜ヶ崎というのは、大阪に住んでる人でも近づかない人が多いと思います。なので、釜ヶ崎で釜ヶ崎についてのイヴェントやセミナーをやるのもいいけど、釜ヶ崎以外のところで、釜ヶ崎の人や釜ヶ崎に関わっている人らが、釜ヶ崎についてのイヴェントをやればいいと思って、で、出張釜ヶ崎。

◆　◆　◆

＊1 自助グループ

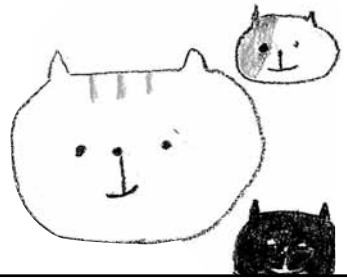
なんらかの困難や問題、悩みを抱えた人が、同様な問題を抱えている個人や家族と共に、当事者同士の自発的なつながりで結びついた集団。その問題の専門家の手にグループの運営を委ねず、あくまで当事者たちが独立しているというのが特徴的である。薬物依存の自助グループとしてはＮＡ（Narcotics Anonymous）がよく知られている。

＊2 ダルク

ダルクとはDrug Addiction Rehabilitation Centerの頭文字をとってＤＡＲＣと表す。覚せい剤、シンナー、処方薬、咳止めなどの薬物依存症者が、刑務所、拘置所、精神病院などで解毒後、薬物を使わない新しい人生を歩むための初期的な回復の支援を行っている施設。全国に50ヶ所、70施設点在している。スタッフは主に回復者が務め、薬物を使わない生き方の基礎作りを行っている。

＊3 フリーダム

薬物依存症からの回復支援を多角的に展開する市民団体。大阪ダルクの外郭団体ダルクとの協力関係を軸に、薬物依存電話相談、家族の個別相談及びグループワーク、拘置所に収監中の薬物依存者へのインタベンション・プログラム、セミナーの開催、出版、ＤＶＤ制作、予防教育への協力、刑務所での薬物依存離脱指導への協力などの事業を展開。当事者、家族、専門家が立場を超えたネットワークを組んで回復支援に取り組んでいる。
http：//www.freedom-osaka.jp/



- また参加したいです。とてもあたたかい会場でした。ありがとうございました。
- お話を聞いていて居心地がよかったです。ありがとうございました。
- 問題をいかにして解決していくのかより、いろんな方の話を「聴く」ことがすごく豊かで大事なことだと思いました。
- 薬物に関しては、知り合いもやっていましたが、なかなか体験が無くやる人の気持は解りません。しかし私のやっているたばこ、酒も、ある意味依存していると思っています。良いイベントでした。
- 優しい人のなる病気なんだと思った。倉田さんの言い切らない話し方がすごく良かった。
- 申し訳ないですが、まだ薬物依存に関して関心を深くは持っていません。ただ、多くの方が倉田氏の話に深く聞き入っているので、何故そこまでと不思議に思う次第です。
- どうも有難うございました。パワーゲームから離れたいと思っていますが、とらわれていますね。己の中に高位になりたいと思う気があります。私にとってのシバイが倉田さんにとってのダルクみたいになれれば、と思います。

椎名（しいな） 保友（やすとも）

障害者支援（しょうがいしゃしえん）

プロフィール

◎障害者支援：椎名 保友（しいな やすとも）

1975年東京生まれ。1999年大阪芸術大学芸術計画学科卒。大学卒業後、新劇の老舗劇団に就職。その傍ら「パーティ・パーティ」にて、障害者介助のアルバイト。2001年より「パーティ・パーティ」の母体である特定非営利活動法人 日常生活支援ネットワークに転職。2008年より、大阪府下で地域の障害者に携わる支援者の募集・人材育成のための連携事業「福祉・介助者ポジティブネットワーク」を立ち上げ。地域福祉業界の周知と盛り上げ、所属団体や活動地域、分野を越えて互いに育てあう場つくりに取り組む。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：まず『分野横断』という言葉に賛同しました。ちょうど「福祉・介助者ポジティブキャンペーン」（＊1）という障害者の地域支援に携わる人たちをつなげていく取り組みをしているのですが、地域の課題解決のためには様々な専門分野が日頃から×（かけあわせ）を持っていくことの必要性を強く感じております。「えんがわ事業」はまさにその×（かけあわせ）の実践を試みていくことでしたので、参加をさせていただきました。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：毎回、参加者の半数以上が福祉職の方でした。みな現場で〝法とか制度とか〟と、〝自分と利用者さんとの関係性〟の狭間に矛盾を感じています。この相談会ではみんながいつも思っている矛盾に対していっぱい語りあえたこと。またこの相談会がなければ、日々の思いを言える場がないことに福祉現場の人間として責任を痛感すると共に、なんだか切なくなりました。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：「なにをやってもいいぞ。しかしウチはなにもやらなければいらないからな。」と現在のボスに誘われたのが、転職のきっかけでした。当時、劇団の制作部に就職しながら、夜はヘルパーという生活を2年間していました。

〝介助のおシゴト〟はアルバイト雑誌でみつけて、こづかい稼ぎに始めました。

僕はプロデューサーを目指していたのですが、結局、社会的なことやいまの職場の方がのびのびと力を発揮できるので、この選択は正解でしたね。

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：地域での障害者福祉って、「カウンターカルチャー」だよって思っています。

生活者（障害当事者）も支援者もひとりの人間としてこだわりを持ち、日々無意識なのですが、影響を与え・受けあう。この影響がお互いという個人から、地域や社会まで「ジュワ～」と浸透していく流れに立ち会っていることを実感しています。〝介助のおシゴト〟は『世間のものさしや仕組み』ではない。自分がいまここでどうするの？結構無茶したり、されたりが性に合っていましたね。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください

A：僕は最近まで、家は天下茶屋。職場は大国町（＊2）。いつも通り過ぎていたのにこの街では異邦人気分。この街は生きている。問題はいっぱいあるけれど人が集まると生々しいエネルギーになり、それらを枠組みじゃなくて、文化というか風土が包みこんでいる。

人間と生活が生々しくてしょうがないなと。用事や元気がないとふらふらできない街です。

えんがわ日和アンケート感想

- 他の方の話が聞けて、自分は一人ではないと感じることが出来ました。
- 自分の思っていた矛盾、同じように思っていた人たちがいてよかった。いろんな人がいることが楽しい。
- みんなも、同じ矛盾を感じて生きているんだと安心すると同時に福祉のあり方には、疑問を持っている。
- 何か目的や考えがあって参加したわけじゃなく、とりあえず人の和の中にいれたらと思い参加させていただきました。何故かわかりませんが心がホッとしました。ありがとうございました。
- 初めての参加でしたが、たくさんの方々と話せた事、熱い思いを忘れず語る方、とても良かったと思いました。色々な立場の方がこの様な会に集まった事、捨てたもんじゃないなとうれしかったです。
- 人はそれぞれの苦労や苦しみの中で、せいいっぱい頑張って生きて居るんだな～と思った。
- 全く知識の無い分野でも話を聞いていると関わる部分もあって、ためになりました。

↑↑↑↑

でも今回の機会のおかげで少しは立ち寄れるようになれましたかね？

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：毎回、緊張しました。そして終わった後がとても気持ちよかったです。

「支援」に対して思いを募っている方が真剣に自分の気持ちを語る場って、福祉分野でやると形だけになるんですよね。このえんがわ相談会は形だけになってしまってはいけない。福祉という枠内ではないところだからこそ真摯になれました。この「枠内ではないところ」というのがミソですよね。そこにおもしろさ・むずかしさ・可能性を強く感じました。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：いつも分野って、縦割りだよなって思っていたのですが、この「カマメ」でやったことで「テーマ」に関心のある人も、ふらっと来られた人も巻き込んでえんがわ相談会が出来たこと。これは意外にない機会ですので貴重な体験でした。「福祉分野」内でやると高齢者だとか、障害者だとかもっと細分化されるけど、ちょっと違う立ち位置からだとこんなかんじで横断できるんだと発見できました。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：社会に関して、無関心にならないこと。知ること。独善的にならないこと。そして様々な「マイノリティ」なテーマが互いに関心を持ちあうこと。そんなみんなが明るくフラットにお話ししあえるこの事業のようなことを、各地でいっぱい行なうことが大切。まちづくりや社会的なことへの〝仕組みづくり〟じゃなくて、もっと自分たちひとりひとりの話しをしましょう。

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：別分野の専門家同士のコラボや対談。例えば「福祉」の僕と「地理学者」の原口さんで都市生活について語る。「福祉」×「子ども」でインクルーシブ教育。倉田めばさんに自立と支援について、教えてもらったり。社会の〝ものさし〟である総論とその〝ものさし〟は人にやさしいのか？という各論を伊田さんと。など、分野を横断していろんな人と専門性を交え、対談してみたいですね。違う分野に関心ある参加者ともお話ししたいです。

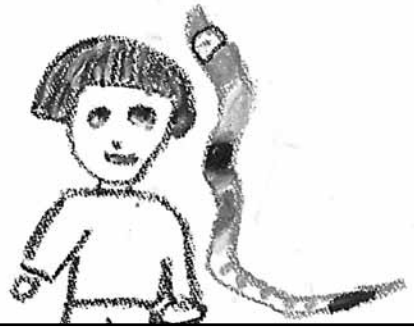
◆　◆　◆

＊1 福祉・介助者ポジティブキャンペーン

地域の障害者福祉というおシゴトを一般に知っていただくためのキャンペーン。現在、福祉職の人が所属に捉われず、孤立しないで頑張れるような環境にしていきたいという思いから、大阪府下の40団体とネットワークを組み、大小様々なイベントや合同学習会を「ポジティブ」に展開しているプロジェクト。

＊2 天下茶屋・大国町

天下茶屋は大阪市西成区の地名。大国町は大阪市浪速区の地名。ともに釜ヶ崎に隣接している。天下茶屋の一部は行政によって、あいりん地区として指定されている。



- 他の人の話を聴くことが出来てうれしかったです。
- 問題設定をどうするかということよりも、とにかく場を持つことが大事と思いました。
- 分野横断を前提としつつも、専門的なテーマについて、話すことの重要さをかんじました。
- 福祉のことについてよりわかるようになりました。よかったです。
- 普段お話できない人たちと日常感じるジレンマや思いなど、率直に話ができてとてもよかった。みんなが耳を傾け合ういい雰囲気でした。
- 途中に来てごめんなさい。会話内容参考になった。障害者の人に今後安心感を。
- 自分は、強くはないが、生きていく事にほこりをもっている。
- 近所の井戸端会議のような雰囲気が楽しかったです。
- 障害者の人の置かれる状況がひどすぎる。あまり考えてなかったように思う。
- 障害を持っている人との交流をしたい。
- 自分の兄も精神の病気だったので、障害者の人達にも住みよい環境（仕事）作りをもう少し皆で考え、手を差し出せるような社会がくればよいと思います。

山下（やました） 裕子（ひろこ）

こども・こそだて支援（しえん）

プロフィール
◎子ども・子育て支援：山下 裕子
（やました ひろこ）
（社）子ども情報研究センター事務局長。子ども情報研究センターは、子どもの権利擁護、子どもが一人の人として社会参画できる条件づくりなど、子どもとおとなのパートナーシップ社会を求めて、さまざまな活動をしている。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：カマン！メディアセンターには、おじさんがきてる…でも「こども・こそだての相談」ってことは、近所で子育てしている人がいて、来はるんやんなぁ。そしたら、私たちの出番!!会いたい!!と思いました。

事務局の「この相談会をきっかけに、カマン！メディアセンターに新たにこどもや親が来てくれたら」という願いもいいなって思いました。そのお手伝いをしたい!!って思いました。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：子どもの声をきくことを大事にしていますって話をしたときに、「人って言いたくないことあるやん。話したくないときに、きくよ～っていうのは傲慢なんちゃう？」って言われたり。また、子どもや子育て中の人に、支えあっていこう、助けてって言っていいよって伝えたいって話をしたときに、「お互いさまって言うけど、自分にあげるものがないと助けてって、言えないんだよ」って言われたりして。そうなんや。それでもききたいと思ってる、一緒に考えたいと思ってる。支えあいたい。助けてって言って…というやりとりの場面。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：子どもの頃、おとなって勝手、子どものことバカにしてるって思ってました。おとなになって、「子どもの権利条約」（*1）ができたことを知って、これがあったら、子どもが安心して、自分の気持ちに自信を持って、こう思ってるよ!!っておとなに伝えられると思いました。そして、いつしか子どもの権利を守る活動ができたらいいなと考えるようになりました。1996年に大阪で開催された「子どもの権利条約フォーラム」で、子ども情報研究センターの存在を知り、今に至っています。

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：相談にこられる方の人生がほんとうにさまざまで、人って生きてるんだなぁ、人はつながって生きてるんだなぁと感じること。その方を理解したいと願い、あ～でもない、こ～でもないと話し合えるスタッフがいること。子どもの声をきこうとしない社会に対して、一緒に怒り、声をあげる仲間がいること。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください。

A：相談会には、子どもや子育て中の人は来られませんでした。おじさんやスタッフの方と、

えんがわ日和アンケート感想

- みんなの気持ちが判り、世の中の仕組みがおかしい事に気づく。
- 自分の子どもを育ててみて世の中の父子家庭に対しての援助がなかった。
- みなさんが悩みをきいてくれて、助けてくれた。
- 子どもをキーワードに、家庭・地域・教育について、他の参加者のみなさんの考えを聞けたこと。
- 男性が多くて、いろんな考えを聴かせて頂けて、中味が濃くて楽しかったです。なかなかない貴重な機会でした。ありがとうございました。
- 家族ぐるみで参加出来るようになれば、なお良いと思います。
- 語ること、聴きあうこと、この場でゆるやかに人とつながることはありました。
- 極端について考えをめぐらせることは大切かもしれない。ことば上であれ、どちらかをえらぶことはしたくないと思った。

自分の子ども時代の話をしました。あたりまえなんだけど、あ～みんな、子どもだったんだなって思いました。

どんな人生を歩もうとも、子どものときの話ができたら、優しくなれるような気がします。思い出したくないことがあったり、悲しくなったり、辛かったりすることがあるけれど、安心して、ききあう場があれば、人と人は近しく感じて、つながれるような気がします。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：参加者の人生そのものがふれあうところ!! いかにえんがわに来ていただくか。えんがわをほそぼそと続けていくことが大事だと思います。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：えんがわに出かけて行って、またそれぞれにどこかに帰る。出かける場と帰る場があるっていいなって思いました。あたりまえのことかな。いろんなあたりまえのことにジ～ンときたえんがわでした。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：出会って、おしゃべりすること!!

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：相談会のテーマに、「役に立たないもの」を入れ続けること!!

◆　◆　◆

＊1 子どもの権利条約

子どもの権利とは、ひとりひとりの子どもが人間としてあたりまえにもっている願いや考えのこと。子どもの権利条約とは、世界中のすべての子どもたちがもっている〝権利〟について定めた条約で、子どもには保護される権利、必要なものが与えられる権利、参加する権利があると書かれています。1989年11月20日に国連総会で満場一致で採択され、日本は1994年に批准しました。

高見 一夫（たかみ かずお）

就労支援（しゅうろうしえん）

プロフィール

◎就労支援：高見 一夫（たかみ かずお）

株式会社ワーク21企画代表取締役。中小企業診断士。A´ワーク創造館（独立行政法人雇用能力開発機構委託大阪地域職業訓練センター）館長。中小企業やコミュニティビジネスの経営支援、障がい者作業所支援、若者就労支援、職業教育訓練等の分野で調査・研究・支援活動に取り組む。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：釜ヶ崎のまちの中に、ふらっと立ち寄れる場があって、そこで、専門家相談をするというのは面白いと思いました。私自身に与えられたテーマは「就労支援」でした。私自身が個別の人に対する就労支援をすることはありませんが、関わっている障害者作業所の支援や職業に課題をもつ人を対象に職業教育訓練を行うAワーク創造館（＊1）のことをお伝えすると同時に、今後なんらかの関わりができたらいいなと思いました。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：参加者は労働者の方、職業訓練を受けておられる方、障害者就労支援事業所を立ち上げようとされている方などさまざまでしたが、参加者のうち何人かが、「おれ、精神の病があるんや…」などごく普通に自分のことをお話し

えんがわ日和アンケート感想

- 全く知らなかった活動を知ることができました。初めての参加だったので緊張しました…。
- 気軽に専門家の話を聞けて良い機会になりました。普通の勉強会じゃなくて、実際に悩みを抱える方が参加していて、貴重な場だと思います。
- ほのぼのとむずかしい話ができてよかったです。
- 今後、働いていく上で気をつけたい内容などが聞けたのでよかったです。

←←←←

されるのがこの場所のすごさだと感じました。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：知的障害者の働く場を作ろうというプロジェクトに参加したことをきっかけに、障害者の作業所や授産施設（＊2）の支援に加わったり、Áワーク創造館の講師をしていたことがきっかけで、同館の館長を勤めることになりました。

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：授産施設・作業所のサポートや企業との関係作りをすることで事業や利用者さんがなんらかのかたちで変わって行くこと。Áワーク創造館の講座を受講した人が講座終了後就職につながったり、起業をする人が出てきたり、さまざまなかたちで関わってくれること。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください。

A：とくにココルーム周辺は人通りも多く、いろんな人が集り、それぞれの人生が行きかう街だと感じました。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

- パソコン教室の件で、一度しっかり身に付けたいと思った。高卒資格が得られるような講座を是非立ち上げて欲しい。
- えんがわ相談会に参加して自分に意欲がわいてきます。また色々と勉強したいです。
- 年をとると、就職もしづらい。おまけに学歴ではねる企業が多い。自分がこの仕事がしたいと思っても、結局いけない。
- 就職難の時代に、Á創造館の存在は大きいと思います。新しい形の仕事を作っていくのも大切だと思いました。

A：上にも書きましたが、初めて会った人でも普通に自己開示できるところが驚きでもあり、面白さでもあると思います。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：この事業を通じて釜ヶ崎に住む人だけでなく、遠くから来る人、さまざまな立場の人がやってくることです。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：難しい質問です。一つだけ言えるとしたら、今回のような場をつくり、人のつながりをていねいに紡いでいくことではないでしょうか。また、それぞれが抱える課題を前に進めるためには、すでに取り組みを進めているさまざまな社会資源（企業やＮＰＯ、公益法人、地域諸機関）との関係づくりが必要だと思います。

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：今のままがいいと思います。

◆　◆　◆

＊1 Áワーク創造館（大阪地域職業訓練センター）
中小企業で働く人たちの学び直しや、就職につなげたい人たちの職業訓練を行ってる。

＊2 授産施設
障害などで就業がむずかしい方に対し、就労または技能の修得のために必要な機会をつくる施設。

尾久土（おきゅうど） 正己（まさみ）

つながりの創造（そうぞう）

プロフィール
◎つながりの創造：尾久土 正己（おきゅうど まさみ）
1961年3月、岡山県生まれ。大阪教育大卒、高校教師、天文台研究員、天文台長を経て、2003年より和歌山大学学生自主創造科学センター教授、2007年より同センター長、2008年より観光学部教授。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：釜ヶ崎が、自分たちがこれまでやってきた天文教育の活動に対する考え方を変えるきっかけを与えてくれた場所なので。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：観望会は天気に恵まれなかったために室内での講演会になったが、話のあとの質疑応答がなかなか終わらないほど多くの質問をもらった。普段の場所での講演会ではこのようなことはほとんどない。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：高校生のときに地球に接近した大彗星に振られてしまったことが悔しくて天文の世界に入った。しかし、今の仕事にたどり着くまでには仕事を転々としているが…。

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：宇宙の話を聞いた学生や市民の目が輝くこと。また、手の届かない世界のことをあれこれ考えること。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください。

A：これまでは、天文学の発展のため（納税者への還元）に、あるいは青少年の科学教育のために活動してきたが、釜ヶ崎で宇宙の話や観望会をする機会を持てたことで、なんの大義名分もなく宇宙を語ったりすることができるんだということを学んだ。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：私の担当に関しては、天気と開催日の設定。本当は、三角公園（P36釜ヶ崎用語解説参照）の他の行事に関係なく、月の形や天候で自由に実施したい。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：上に述べた通り。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：手が届く世界のことだけを考えていると、手に入らないことがストレスになる。しかし、宇宙のよう

えんがわ日和アンケート感想

- 普段学ぶことが出来ない話を、雑談を交えて楽しみながら学べました。
- 月の事が少し解りました。
- あまりにも目先の事にとらわれている事に気がつきました。
- 月について、星についてなどあまり考えたことがなかったので新鮮でした。
- 「月」の成り立ちを詳しく教えていただき、とても勉強になりました。望遠レンズで見えたクレーターも美しかったです。
- せつ明がよくわかった。
- おもしろい、興味、すごい。
- たいへん勉強になった。ありがとう。心がなごみました。
- 誰でも気軽に参加できる環境が素晴しいですね。また参加させていただきたいです。
- 曇天で、月がはっきり見えなかったのは、少し残念でしたが、月の事が少しわかっただけでもよかった。
- 宇宙論に興味あり
- 思いがけず、色々な方との会話や情報も得られ、交流できました。それがすごくうれしかったです。

←←←←

に届かない世界のことを時々で良いから考えることが、心を豊にすることにつながるのではと思う。

Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：他の分野の講師と一緒に観望会。宇宙と薬物とか、そういう組み合わせは面白いと思う。

えんがわ日和アンケート感想

- 宇宙の広大さの話、自分におきかえると自分のちっぽけさが身にしみて判ってくる、ああ、なんて宇宙はすばらしい。そこに生まれた俺たち、生命はみな仲間だと大きな意味で感じた。
- 寒い中、星を見れなかった事は残念でしたが、後の鍋が頂けて楽しかったです。昭和を思い出しました。
- いろいろといいと思います。これからもよろしく。
- たいへん勉強になった。有難う御座いました。

木原（きはら） 万樹子（まきこ）

法律問題（ほうりつもんだい）

プロフィール

◎法律問題：木原 万樹子（きはら まきこ）

木原法律事務所 弁護士。'74年豊中市生れ。'96年京都大学経済学部卒業。'98年京都大学経済学部経済動態分析学科博士課程入学（中退）。'04年大阪弁護士会登録、人権擁護委員会ホームレス問題部会、社会保障部会、刑事弁護委員会等。ホームレス法的支援者交流会代表。LIFEMETHODというバンドで、京都を中心にライブ活動も行う。

Q：「えんがわ事業」の話をはじめて聞いたときにどのように思われましたか。お忙しいなか引き受けてくださった理由は何でしょうか？

A：正直、事業の具体的な内容が全く想像出来ませんでした…（苦笑）。引き受けたのは、でも、そんな（ゆるい感じの）ココルームが好きだからです。

Q：相談会・勉強会の中での、参加者とのやりとりで印象的だったことや場面について、教えてください。

A：こちらも、壇上から話しているのでもなく、参加者も座布団に座って、お茶を飲みながら、「そうか。そうか。」などと言ってもらえるのが印象的でした。

Q：今のお仕事につくきっかけはなんだったのでしょうか？

A：母親（弁護士）が亡くなり、その葬式で、必死に泣いてくれる依頼者を見て、その姿に感動したことがきっかけです。

えんがわ日和アンケート感想

- 気軽に弁護士さんと話が出来て良かった。
- 釜の街で法律的な根拠を教えて貰い、非常に役に立ちました。
- 別件にて、色々と聞いたら、ていねいにおしえてくれた。ありがとう。
- 具体例を通し、社会での問題への矛盾について、わかりやすく教えて頂きました。
- 弁護士の方が、現場でがんばってらっしゃる事など知りませんでしたが、大変興味深く、おもしろいお話でした。

←←←←

Q：今のお仕事のおもしろさは、どんなところにあると感じていますか？

A：自分にしか出来ないことが必ず見つけられることだと感じて（否、信じて）います。

Q：今回の企画で、釜ヶ崎という地域に関わって感じたこと、考えたことがあれば教えてください

A：やっぱり、許容量の大きなところだなあ、と感じました。（弁護士登録当初に生活保護申請に同行しに来たため）私の弁護士としての原点ではあるのですが、これからも関わり続けたい、と考えました。

Q：この事業のおもしろさ・むずかしさ・可能性は、どんなところにあると思いますか？

A：おもしろいのは、異常なくらいのゆるさと敷居の低さ。むずかしさは、わかりやすい結果を出すこと。ただ、だからこそ、無限の可能性があると思います。

Q：事業を通して、なにか新たな「発見」があれば教えてください。

A：夜になると、ココルームが客の自主的経営になること。

Q：混迷を深めるこの社会（たとえば、貧困・分断・排除・孤立などの状況）の中で、今後、わたしたちが生き延びていくための手掛かりがあるとすればどんなことでしょうか…。

A：自分の頭で考えて、生きることを信じることではないでしょうか。ただ、どんなに社会が混迷を深めていようと、「自分」が生きるのは、なかなか面倒くさいですよね。面倒くさい、ということを忘れないで、自分であり続ける、というのが「手掛かり」かなあ…。

- 弁護士さんの熱意がとても伝わりました。現場との距離感の難しさでも続けていかなくてはならない支援、大切なのは人と人だなとあらためて痛感しました。
- ざっくばらんに話してくれてよかった。こういう弁護士の人がたくさんいれば、みんなが気楽に相談できると思う。
- もの足りない、3時間くらい要りますね。
- 皆さんとのコミュニケーションが良い。

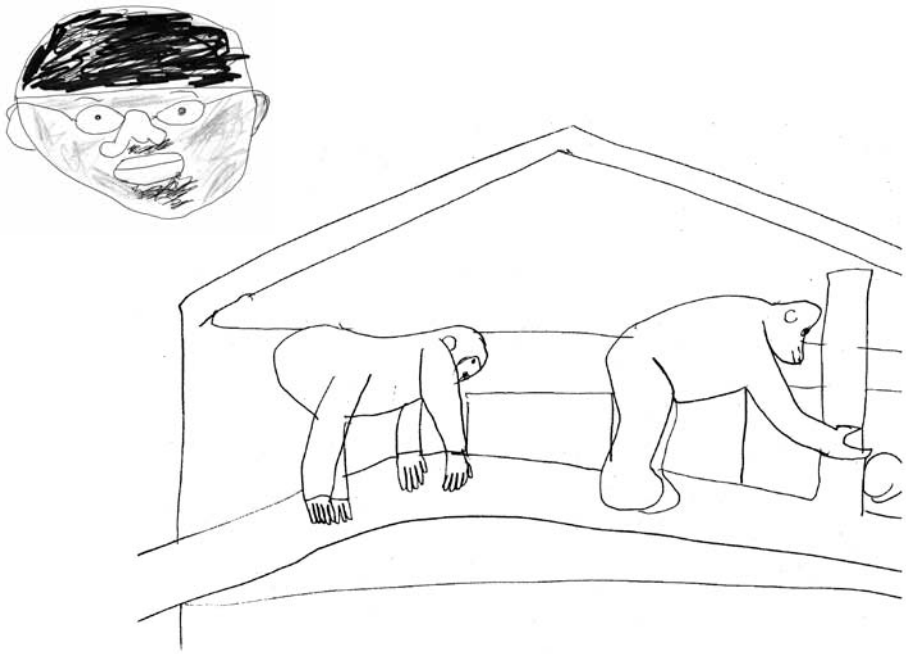
Q：今後もっとこの事業をおもしろくしていくとすればどんなアイデアがあるでしょうか…。

A：もう少し、かたい人達の所属するところ（例えば、弁護士会（＊1）とか役所とか…）にも積極的に宣伝していったらどうでしょうか。この事業に参加してもらえば、何だかよくわからないところにこそ、居場所がある、とか感じてもらえるかも知れません。

◆　◆　◆

＊1 弁護士会

弁護士を構成員として形成される団体。各国の法制度に応じて、所属することが弁護士としての業務を行うための要件とされている場合や、弁護士相互の情報交換・研修などを目的とする任意団体として構成されている場合もある。



わかりにくいけどよくわかる 釜ヶ崎 Q&A

イラスト：ありむら潜

Q 釜ヶ崎ってどんな町?

A 大阪府大阪市西成区にある「日本最大の寄せ場・ドヤ街」として知られる地域です。半径300mほどの地域に約2万1千人が生活し、そのうち約5千人が日雇労働者であると言われています。なお「釜ヶ崎」という地名はすでに住所改変で存在せず、通称として「釜ヶ崎」もしくは「釜」とよばれています。

Q 寄せ場・ドヤ街ってなに?

A 寄せ場とは日雇労働の求人業者と求職者が集まる場所のこと、ドヤ街とは簡易宿泊所（“宿”をひっくりかえして“ドヤ”）が立ち並ぶまちのことです。寄せ場が拡大・集約するにつれ労働者のための簡易宿泊所ができ、その結果、いわゆる「日雇労働者の町」が形成されると言われています。

Q 日雇いってなに?

A 働き方の形態のひとつ。その日ごとの契約、もしくは30日以内の期間を限定した雇用の仕方のことを言います。短期的な雇用と解雇を繰り返し、景気の影響を受けやすいため不安定な就労となりやすいです。
釜ヶ崎における日雇労働の職種としては、例年建設業が90%以上を占め、残りが製造業、運輸業などです。*

Q 日雇労働者以外の人は何してるの?

A 現在釜ヶ崎で日雇労働をしてくらしている人は約5千人いると言われていて、それ以外には生活保護を受けてくらしている人（推定約9455人）*、野宿をしてくらしている人（推定600人/1日あたり）*、商店や宿を営んでくらしている人、などです。

＊ 参考　釜ヶ崎のまち再生フォーラム 2010

Q 野宿者ってなに?

A 公園や路上で生活している人のこと。釜ヶ崎では「野宿」という言葉がよく使われます。日雇労働は不安定な働き方なので野宿する可能性も高くなります。ちなみに野宿者の疾病・自殺死亡率は一般の人と比べて極めて高く、疾病50〜59歳で7.5倍、自殺は6倍、結核は44.5倍、餓死・凍死は60〜69歳が多いということです。

Q なぜそういった人が多いの?

A 釜ヶ崎のまちは、国の経済発展の過程で、建設労働、港湾労働などの労働力が必要となったため全国から労働者をあつめる場所として、施策の中でつくられてきました。さまざまな困難な事情からこの地域にやって来た人が、さらに、不安定な就労形態、三畳一間の宿でのくらしなど、さまざまな影響で、貧困、単身、孤立などの状態から抜け出すことがむずかしく、現在も高齢の単身男性が多くくらします。

Q 釜ヶ崎ってどんな町だと思われてるの?

A 多くは日雇労働者のまちと思われています。1961年に、車にはねられた労働者を警察が放置したことがきっかけで第一次暴動が起こり、その後も暴動が何度も起き、それをメディアが報じる中で、怖いところ、行ってはいけないところというイメージが定着しました。一方で人情のあるまち、人があたたかいまちということで足を運ぶ人も多くいます。

釜ヶ崎用語解説

飯場▼ 一定期間の契約雇用においての労働者の宿舎。通常は労働者の生活費が給料から天引きされます。

契約▼ 一定期間飯場に泊まりつつ仕事をすること。

現金▼ 1日のみの日払いの仕事のこと。不況の影響で現金仕事は少なくなっています。

手配師▼ 現金仕事や飯場の斡旋、手配等を寄せ場や街頭で行う人。労働法的には違法。

人夫出し▼ 元請け―下請け―孫請けなどの重層構造の末端で、労働者を現場に供給するのみの業者。違法とされる中間搾取が行われることが多い。

アブレ▼ その日仕事につけないこと。

アンコ▼ 日雇労働者の蔑称。あるいは自嘲として用いられる。海底でぢっとしている鮟鱇（アンコウ）に似て、路上に佇み仕事をまっていることに由来。

あおかん▼ 野宿をすること。

シノギ▼ 路上強盗。

センター▼ 萩之茶屋にあるあいりん総合センターの略称。あいりん公共職業安定所、西成労働福祉センター、大阪医療センターが入っています。大阪府の日雇労働対策として西成労働福祉センターが1962年に設立、1970年に総合センターとして現在の場所に。

三角公園▼ 萩之茶屋南公園。釜ヶ崎におけるいちばん大きな公園。夏まつり、越冬、炊き出しなどが行われています。

西成警察▼ 釜ヶ崎の真ん中にある警察署。暴動対策のため要塞のようなつくりになっています。

暴動▼ 労働者が蜂起する現象。暴動のきっかけの多くは労働者への公的機関などの不当な対応が原因と言われています。2008年6月に第24次釜ヶ崎暴動がありました。

臨泊▼ 臨時宿泊所の略で、越年対策事業のひとつ。大阪市が提供している臨時宿泊所提供事業。

特掃▼ 特別清掃事業。市、府が行う高齢者対策の就労事業。地区内の生活道路およびセンター内などの掃除を行う。55歳以上、1日5700円。登録制。1200人ほどが登録しています。

釜ヶ崎夏祭り▼ 8月13日～15日に行われます。三角公園に櫓が組まれ、相撲や綱引き、すいかわり、ライブ、炊き出し、慰霊祭（1年間に亡くなった方の名前が呼ばれ黙祷をささげます）などが行われます。

越冬▼ 釜ヶ崎越冬闘争実行委員会が行う活動。仕事のない年末年始の労働者のための支援活動を行っています。炊き出し、パトロール、蒲団敷き、ライブ、夜回りなど。

アブレ手当▼ 雇用保険日雇労働者休職者給付金。日雇労働者のための雇用保険制度で支払われる給付金。

白手帳▼ 雇用保険日雇労働者被保険者手帳。アブレ手当をもらうための手帳。1日働くごとに1枚印紙を貼り、過去2ヶ月で26日働くことが必要。港湾労働者手帳が青手帳とよばれたのに対して、白手帳とよばれます。

あいりん銀行▼ あいりん貯蓄銀行。労働者のための金融機関。

釜ヶ崎の労働者

カマやんの4コマ コラム

まんが：ありむら潜

えんがわのおしゃべり紹介

2010年11月10日（水）
高見一夫：就労支援
えんがわおしゃべり相談会
～「働きたい」をつなぐ～

Aさん：きのうやっと仕事決まったんですけど…

一同：おおー

Aさん：ちょっとぼく精神的に障害がありまして、まあ明らかに障害とわかる人と、ぼくみたいにちょっとした、人とちがうっていう障害をもった人っていうとやっぱり就職しずらいんですけど、そういうものに対してとか、なにかあるのかとかちょっと興味があります。

高見：このエルチャレンジっていうのは、知的障害者がメインの事業なんですけど、精神障害の方もおられますし、その支援にも入っています。で、就職も実現していることも多いです。

Aさん：わかりました。また後でおはなし聞かせてください。

Kさん：大学4回生のKです。ココルームのことで卒業論文を書こうと思っていて、ずっと通ってるので、今日この会に来させてもらいました。

Mさん：ぼくは、日常はデイケアに通って、1日中病院とかけもちで、そういう毎日の日々が続いてます。

Sさん：Sです。自分もこのまちにきて6年になります。4年間くらいはある会社の寮でバリバリやってたんですけど、ここ1年くらいは仕事がなくて、携帯電話もって横のつながりを広くして、今はちょっと仕事があるかなってくらいで。ひと月26日くらいはバリバリ働きたいと思ってるんだけど、やっぱひと月15日働くのがやっとというくらい、今仕事が少ないですね。あと、地元にいたときに兄が躁鬱病という病気になりまして、まあ精神病院に1年くらい隔離されてたのかな…そういう兄を見てて、障害者に関心があります。以上です。

Hさん：Hと申します。わたしは、まえに作業所ではたらいていて、今ちょっと休職させてもらってるんですけど…。

高見：ああ、そうですか。

Hさん：ぼくは、前の作業所でも給料5千円（1ヶ月）ぐらいしかくれないときがあって。こんなんでいいんかなって…。給料あげたらって、2回か3回言うたことあるんですけど。で、ぼくやめたきっかけは、N区だけで働くのはちょっといややっていうことがあって…ほかの地区でもやりたいなっていうんがあって。で、もうやめようかなって。内職もないし…。このままではいやだって言って。やっぱり他の仕事したほうがええんかなって、西成の方で。今のN区の作業所の給料はあまり変わってないとおもう。

高見：ああ…。

Hさん：全然ね。最高でも7千円くらいしかくれないことがあった。

Jさん：仕事はなんでしたっけ？

Hさん：海賊版のDVDの内職です。

一同：ええっ?!

Nさん：ほんまかいな!?海賊版のDVD!?

Hさん：内職は海賊版のDVDを…。

Nさん：えらい話になってきたな…。

Hさん：で…業者がどっかいっちゃって…。

Oさん：そういう悪質な作業所ってあるんですか？

高見：あるかもわかりませんね…。

Nさん：そうかそうか…。

Sさん：どういう募集からそこへ行ったの？

Hさん：それはね…ぼくもちょっと…。

Sさん：やっぱり勧誘とかそういうのがあったの？

Hさん：そうーですね…。

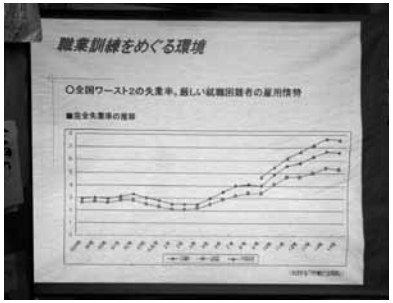
高見：それは作業所ですか？

Hさん：はいー そうです。

高見：まあいろんなところがありますね。内職仕事でもめちゃくちゃ安い単価でね、仕事出してたりするわけですよ。見方によっては、仕事出してるんかこき使ってるんかわからんようなことってよくあるんです。業者からしたらあります。

Nさん：あ、そう… そうか…。つらかったね…。

Jさん：その話の改善につながるかわからないのですが…先ほどお話にあった、高見さんが事故にあわれて、働けなくなって、家に引きこもるようになったというお話で、そこから復帰されたときっていうのは、どんな支えとか、どんなきっかけがあって、今の状態になられたんですか？



高見：気が付いたら今になってるんやけどね…正直なところ。あのー、ひとつはやっぱり友達ですよね。なんか小さなアルバイト仕事でもいいから、もってきてくれる人がいてるということがあった。

Jさん：内職のお仕事？

高見：はい、最初は内職的な仕事ですね。最初はやっぱり体が動かないから、そういう家でできる仕事、「こんなん、やったらどうやー」って言ってもってきてくれる人がいたり、それから、今度こういう仕事あるからいっぺんやってみいひんかって言ってきてくれる人がいたり、それが大きかったね。先ほどのこのエルチャレンジという事業協働組合をつくるときも、そういう仕事ですから。仕事としてもらったので、そういうものを紹介してくれる友達がいたということだと思います。

あとは地域かな。さっきもPTAって言ったでしょ。仕事ではないんだけれども、地域の人といろんなことやっていると、いろんな情報が入ってきたり、そこで役割ができたりするじゃないですか。PTAの新聞書いたりね。（笑）これは別にボランティアでやってるんですけど、なんかそういうことがまた逆に、こう自信回復につながったのかもしれないですね。うん。自分にもできることがあるなーっていう感じですね。

2010年12月3日（金）
倉田めば：薬物・アルコール依存問題
えんがわおしゃべり相談会
～薬物依存になってよかった～
わたしの手渡したいもの～

（集まった人が、ひとりづつ自分のことを語っていく場面にて）

めば：どうですか？

Yさん：ぼくはアルコールやから。もうここ1年ほどアルコール依存のことについてずっと考えてるんやけどね。この間も、何回もくりかえしてるんやわ。やめる言うて結局

…ちょっとはやめたんやで。1ヶ月やめたんが最高かな。1ヶ月やめたいう実績はあるんやけど、でも、またそれから酒が入りだして。またね、ちょっとやめるとか言うて、でも、また飲んだりして。そいで、今度はまあ病院も行こうかいうはなしも出て、自分のなかでも病院行かな、治らんのちゃうかーっていうところまで、おれもきもちがいって。待合室まで行ったんやけどね。

めば：どこの？

Yさん：そこのKクリニック。

めば：ああKクリニックね。

Yさん：でもここの診察を受けたら、またおれは弱くなって、おれのきもち自体がしおれるゆうんがあってね。おれはもう、おれの自分の力で治したいいうんがあって。

めば：しおれたらいいのに…笑

Yさん：ええっ?!そう？……ま、今まで自分の力で、こう人生、生きてきたから…

めば：うん。

Yさん：おれも、こうずっと日雇しながらね。生きてきて。で、あんまりそういうんしたくない、いうんがあってね。自分の力で治すんやーいうのが今ものすごいきもちの中にあって。今実際、そういうふうにやっとるんだけども、なかなかまたね…。で、今もなかなかやまらんってことでね。

めば：うん、うん、うん。

Yさん：そやからいっぺんはアドバイス受けなしゃあない、いうんがあるんやろなーってね。お医者さん行ってね。わしの場合…どうなんやろね、この依存症いうんはね。ぼくは対人関係が下手で、むかしは対人恐怖症みたいなのがあったから、そっからこの酒がはじまってるいうんがあってね。それからこの酒に行きだしたんやわ。そこで、だからぼく酒はあんま好きじゃないんですわ。これは誰に言うても信用してくれないけども。酒が好きで飲んでるんではないからね。

めば：アル中はみんなそうや。

Yさん：ほんま?!

めば：あはははYさん：酒好きな人は、くーっといくじゃない?ぼくは酒乱やからね、酒乱やから。ちょっと飲んだらもう何言ってるかわからんとか、そんなんあかんね。

めば：でもYさんお酒1年とかやめたらさ、すごいメッセンジャーになると思うよ。回復者として。たぶんね。すごいと思う。保証するよ。

Mさん：そうだよーめばさんみたいになったら？

Hさん：自分の体験を語って…ねえ。

めば：たぶんすごいと思うわ…。

Mさん：病院行ってみたらいいのにー。

Yさん：クリニックへ行ってアドバイザーにはなし聞こうかなーと思ってるんやけどね。それも僕はいまはちょっと固まってきたんやけどね。そこ行こうとね。

めば：でもやっぱり、1ヶ月しか（断酒が）続いたことなかったら…1年やめたときの自分はどうなると思います？

Yさん：そこまでもしやめれたら、ぼくはええ自信がつくとおもうな。

めば：1年やめたら自信がつくんだ？

Yさん：おそらく、そうでしょうね。歌もやってるから。ああいうとこでも…

めば：しらふで歌がうたえるようになるのね？

Yさん：1回しらふでうたったことあるけどね、1回はしらふやったんやわ。あのときうたえたからね、あのとき結構うれしかった。でも、まだちょっと弱さがあって、よそ行くときには飲んでしまってね。ちょっとした心のあれがあるんやなあ。えーい飲んでしまえ!っていう。弱さがあるんやね。

めば：もうちょっとやねえ…。

Yさん：もうちょっとやね。おれももうちょっと、きもちを強くもたなあかんのかな。

めば：でも自分ひとりの力だけで、無理だったらそっから先はどっか人の力を借りた方が、楽かもしれないよねえ。

Yさん：そやね。アドバイザーをね。病院でね、つくるとかね。

めば：うん、病院ってそんな嫌なところじゃないよ？

Yさん：そそそ、まあーおれがこだわってるだけやから。そういうとこ行くってことを、こだわってるだけだから。別にそんなね…。

めば：精神病院もねえ、住めば都ですよ。

一同：笑

●●●●●●●●●●2010年12月15日（水）

伊田広行：労働問題

えんがわおしゃべり相談会

～労働問題から恋愛問題まで～

伊田：世界中のみんながね、ぴったりと一夫一婦制みたいに、相思相愛にパートナーがみつかるという保証はないっていうのは当たり前やと思います。結果として本当にいいパートナーがおって、仲ええ恋人や夫婦っていうのは、それはそれでラッキーやなとは思いますが。（それが）みんなにないんやから、余りおるなと。でも今の社会は異性愛を基本に、みんながカップルになることを基準に税制度とか法律の制度があって、一人モンは非常に損する税制度なんですね。ほんで社会人として一人モンやと、「ちょっと寂しいやろ」とか、「何か問題あるんちゃうか」とか、「かわいそうに」とか、「老後はどうなんねん」とか、思われちゃうわけです。

僕は、色んな人がおるんやから、基準を変えて、社会の多くがむしろ一人モンやと思って制度を作った方がいいと思ってます。「老後は家族が見んのが当たり前」じゃなくて、老後は家族がいようがいまいが一人モンでも安心できるような老後の仕組みを作ろうと。家族任せっていうのをやめて、社会を色んな状況の人が助け合うようにしたらええっていうのが、僕の思う『個人単位社会』ですね。

Kさん：今僕28歳ですけど、30近づいたりしてみて、やっぱりこういう結婚とか性のことに関して、周りの親しい友人たちも、意外とぽろっと保守的な事を言うことがある。例えば、普通にこれまで楽しく付き合って来た男友達でも、ぽろっと、30すぎて結婚できてない奴は、きっとどっか問題があるんだよ、絶対おかしいって、何かあるんだよ、と言い出したり。他にも、女の子だと、結婚したい結婚したいって言って。相手と一緒にいたいと思ってるのか、結婚が先なのか。結婚を早くするっていう自

分の人生プランに引きずられているというか。すごい違和感があります。

Fさん：現在パートナーがいるんですけど、籍は入れないと、結婚はしないと言っています。けど、一緒に住んでいて、両親も知ってるんですけど、それはそれは周りからの結婚しろの圧力がすごくて。それは、まだ結婚しないの、どうするつもりや、みたいなんで、ものすごいんですよ。もう、パートナーの人がふがいないみたいな感じで言われるんですけど…。本人たちはいい感じでやってるんですけどね。周りが結構そうさせてくれない。どうしたらいいかな、と。心細くなったりするんですけど、今日ここに来て、また、心強く思ったりしています。

伊田：家族じゃないけど地域で友達がおるとかいうのは、大事なことやなと思うんですよ。だから、家族もええけど、家族以外で、もうちょっとゆるやかにね、仕事場があるとか、居場所があるとか、ちょっと仲間がおるとか、行っても排除されへんところがあるとかね。

Hさん：1回この個人単位っていうのやったらすごい大混乱でしょうね…。

伊田：だいたいは北欧のイメージやから、結婚制度がなくなっても、結局は好きなもんは一緒に暮らしたりして、そんなに大混乱にはならないと思うんやけどな。

Kさん：専業主婦っていう職業がおかしかったんですね。

Tさん：一方では、専業主婦が好きな人もいるじゃないですか。旦那を待って、料理を作ってっていうのを、何にも苦痛に思ってない人。で、実質男性がお金を稼いでいて、考えようによっては、女の人も家事という仕事をしているわけで、それをしていることによって、旦那さんが外へ働いてお金をもらえるんやから、そのお金は2人で稼いだ物よっていうはずなんやけど、なかなか男性はそうは思わないよね。

Nさん：「俺が稼いでやっている」ってな。あるな。

Tさん：男性の考えさえ、君と2人で稼いだお金だよっていうふうになるのであれば、別に専業主婦っていうのは、忌み嫌うものではないかなっていう気がする。

伊田：現実はいろいろやから、中にはそういう人がおって全然いいんやけどね。専業主婦のそのカップルの危険性は何かって言ったら、男が失業したらどうなんの？それから、愛情が冷めて別れるってなったらどうなる？つまりキャリアがなくなってる女性は、一生絶対一緒にいるんやったらえけど、そうじゃなかったら、そこらへんが危ない。もし働く場所がもっとあって、働くけど早めに帰って来れるんやったら…仕事もするし家事もするし、子育てもできるとなったら。大抵の人が働くと思う。働くというのは、自分のお金を持てるということでしょ。なんぼ好きな人でもね、人からいつも金もらうっていうのはおかしいんですよ。冷静に考えたら。バランスが悪い。何かけんかの時にやっぱりね、「出て行け」とか。そういうのは、どうなんねんってなるでしょ。

Mさん：出て行けないから、あなたのために奉仕しますってなっちゃって…。

伊田：だから僕のイメージは鎖がなくて、いつでも離れられる。それでもおる、っていうのがええなと思ってるんですよ。

●●●

200円あれば牛乳とパン3つぐらい。お昼何とかなれば、晩、親父が帰ってくるから。
でも、親父のつくった味噌汁とかそういうのを、捨てたことはないなあ…。
Eさん：それは俺の（味噌汁）がまずかったんだろうけど…。
一同：爆笑
Uさん：無いなあっていうのは、やっぱり親父も1人が長いから、そこそこ（料理が）うまくてね。
Eさん：ぼくはしてなかったからね。しゃあないね、突然やからね。
山下：女性の場合はシングルマザーやったら、後輩に来てもらってとかって、助け合ってるっていうか、友だちんとこ預けたり。近所の人に面倒を見てもらったりって、そういうのはできるけど、男の人って…。
Uさん：男のシングルファザーは…。
Eさん：それはちょっとしんどいわね。
Uさん：男のシングルファザーは少ないもんよ。
山下：少ないから、つながる、今回のテーマみたいのじゃないけど、つながるとかってむずかしいのかな。
Uさん：だからいまは、シングルファザーもおんなじ風なお金が支給されるようになったんでしょ？
山下：母子加算？父子加算？でもさあ、男同士助け合わんでも、男と女で助け合ったら、隣のうちのおばちゃんとか。そういうのもしにくかったんよね？
Eさん：そういうのもしにくいよね。
山下：近所に面倒見のいいおばちゃんおったらいいけどね…。
Eさん：おったらいいけど、そこはその家庭も必死やからね。ぼくはアパートやったからね、風呂もないアパート暮らしやったから、向かいに親切な人いはったけど、そこも高校生の娘さんとか障害者の男の子が下におったからね。親切にはしてくれはったんやけどね、たまには子ども預かってくれたりしてくれたけど、飯まではちょっとなかなか難しいとこあった。そこまでは頼めないしね…。ぼくらもちょっとなかなか。
山下：晩御飯くらいなあ。
Eさん：あ、そう？
山下：毎晩とは言わず、たまには。

●●●●●2010年12月17日（金）
木原万樹子：法律問題
えんがわおしゃべり相談会
〜法律もたまには使えるかも…〜

木原：あたし法学部なんて出ていないもんで、憲法なんて全然知らないままに一生懸命（弁護士になる）勉強をしてたんですけど。そんななかで、結構すきだなあと思っていたのが憲法13条でして。なぜすきだなあと思ったかというとですな、「個人として尊重される」と書いてあるところなんですけれど。あたし、なんかこう…わりと変なバントとかやってまして、変な人扱いとかされることが多いので。（笑）こう、「個人として尊重される」とか言われると、すごいうれしいやん！と思って。しかもそれで、幸福を追求する権利があると。生命の自由と幸福を追求する権利があるなんてすごいぞ！と思って。で、それがすごい気に入った。それからその13条とは別に、25条というのがあって、健康で文化的な最低限度の生活の権利…ですよね。そういうことが書いてある。なかなか憲法っていうのはいいなあと思ってですね。で、この13条や25条、この憲法というのを受けてつくってあるのが生活保護法なんですよ。生活保護法の第1条で、憲法25条に基づいて自立助長を目的として、最低限度の生活を保障していくんだ！ということを明言している。で、こういう法律がちゃんとあって、「最低限度の生活」っていうんだから、路上のすごい寒い中とか、暑くるしい中とかで生活をしいられなくてもすむはずだ！というのがわたしの原点です。
でも、弁護士になってから気づいたんです

縁側（えんがわ）に響（ひび）くアフリカの声（こえ）

闘う人類学者　岡本マサヒロ

「オディ」、「エニシャア」。アフリカのサバンナの農村で暮らしていた頃、毎日のように聞いた会話のひとつである。客人が来たときに必ずかわされる会話であり、「オディ」は「ごめんください」、「エニシャア」は「ようこそ」、といったニュアンスになろうか。しかし、客人が通される先は家屋の中ではない。庭先の木陰かどこかに小さな椅子がだされ、客人はそれに腰かけ接待を受ける。

アフリカの民家の庭先は、さまざまな機能をもつ空間である。客人をもてなす場所であるとともに、ゴザを敷いて家族が食事をしたり、昼寝をしたり、女性らが髪を結いあったり、あるいは焚火を囲んで談笑したりする場である。

こうしたアフリカにおける庭先という空間は、ひと昔前の日本の縁側の存在に似ている。縁側も使い勝手のよい便利な空間であった。日なたぼっこをしながら縁側に座っていると、近所の人が声をかけてゆく。時には茶でも飲みながら世間話に花が咲くこともある。屋内なのか屋外なのか判然とわかちがたい縁側は、ご近所さんとの社交の場であった。

アフリカの場合、庭先でもてなされるのは顔見知りの人ばかりではない。見ず知らずの他人であっても、「オディ」「エニシャ」の手続きを踏めば、それなりのもてなしを受けることができる。それゆえにアフリカでは、たとえ知人や親類がいない土地であっても、人びとは旅を続けることが可能となる。どこへ行っても誰かのもてなしを受けることができるからだ。

〈えんがわ相談会〉は、商店街に面したカマン！メディアセンターの縁側という空間を効果的に組み込んだ企画である。通りすがりの人や商店街を自転車で行き来する人が、立ちどまり、耳を傾けていく。アフリカの庭先に相当するような縁側というスペースであったからこそ、こうした開放的な雰囲気を醸しだすことができたといえよう。縁側に腰かけたとき、「オディ」、「エニシャア」という声が聞こえてくる。

けど。弁護士なかまの人とかでもですね、「住所なかったら生活保護ってだめでしょ」とか言ったりするんですけど、ちょっと待てよと。だって、それ以前の問題で、憲法に最低限度って書いてある!って。で、ちなみに住所がなくたって生活保護は申請できますっていうのを明言してます。生活保護法は。でも、役所の人でも、うそついたりするんですよね。

Sさん：今、知らない人同士でものをうごかしているじゃないですか。役所の人も、ケースワーカーもわかっていないし、(生活保護の)申請者もわかっていないし。とりあえず、知らないからお互いに危ないし、知らないとすごい不利益だなっていうことは本当に思っています。

Tさん：法律の専門家が路上に積極的に出て行って、憲法13条を生かしていく、ということは今まであまりなされてこなかったんですか?

木原：わたしが(弁護士)登録したときには、まだ弁護士会館の前にブルーテントが広がってましたからね。で、あたしは「これをなくすんだ!」って。もちろん、行政代執行とかそういう意味のなくすじゃないですよ?!(笑)

一同：笑

木原：でも、弁護士さんみんな知らんふりして通ってましたもんね。だからやっぱりそういう動きはなかったと思いますし、そういうことを(自分が)はじめたという自負はありますけれど…。

Kさん：Kと言います。現在生活保護をもらってます。もらって感じることは、いろいろ問題が多すぎるなということです…。

木原さん：ああー。担当のワーカーさんはおうちに来てくれてますか?

Kさん：それはー、最初だけですね。

木原：最初だけ。

Jさん：Kさんが住んでいたおうちはひどかったんですよね。

Kさん：そうそう。いわゆる準貧困ビジネス。

木原：弁当代高くとられるとか?

Kさん：いや、そこまで行かないんだけれども、家賃評価額だいたい2万円くらいのところで、5万円ちかくとられるんです。

木原：あー、それは。西成区は本当に多いですよね。いったいこの物件はどういう計上の仕方をしているのか…っていうね。

Kさん：三畳一間でずっといたら、ストレスがたまるんですよ。

木原：そうだよねえ…。

Kさん：もともとそこはドヤだったんです。

木原：それはおかしいねえ…。

Rさん：それは絶対おかしいな。

Sさん：今は大丈夫なんですか?

Kさん：今は大丈夫です。引っ越しました。

木原：さっきゆってた、憲法のいう最低限度の生活以上というのは、お金の問題だけじゃなくて、生きがいとかですね。生きる原点の問題かなとあたしは思っているんで。でも日本はまだまだですよね。生活保護の権利でさえ、いまやっと浸透してきて。浸透してきたのはいいんだけど、保護もらってまだ若いのに遊んで…みたいなはなしも出て…。でもそういうはなし以前でね。夢がみれない社会であるとか…やっぱりお金もいるじゃないですか。なんだかんだいってね。部屋がなかったら就職できひんやんとかは、まあ原点ですけど、じゃあどんな風に働くのかとかね。本当に安い給料でしんどい仕事しかこの国にはないのか!とか。そういうことも含めて社会的に最低限度の生活を保障していくというのが重要だと思っています。

●●●●●●●●●

2010年1月21日(金)
椎名保友：障害者支援
えんがわおしゃべり相談会
~支援者って…地域福祉・障害者福祉の現場から~

椎名：もともと福祉ってね、震災の時そうなんですけど、隣で、家が崩れていて、足折れてて動けない人がいます、と。喉乾いてると。んじゃ、ちょっと水を汲んで来ようかって、そういう地べたの話から始まってるはずなんですよ。で、このココルームさんもそうですし、やっぱり地元の人間がすごく必要だと思って、自然に形になって行く。法律とか制度があってなったわけじゃなくて、やっぱりそこに必要を感じる人がいたりとか、何かできたらっていう人が集まってできてくるっていうのが福祉の本来の形だと思うんですけども。10年前に介護保険ができてからすごい変わったのが、制度っていうのをバーンと作ったことで。今までは、結構障害者の支援とかってボランティアだったんですね。隣のおばあちゃんが困ってるから助けようか、とか、障害を持ってて一歩も出れない、「あ、そうかそうか、じゃ俺買い物行く時に一緒に行こうか」ってそんな感じのですね。すごい地べたの話だったのが、制度ができたおかげで、僕らはプロになったんですね。確かに給料があって、お金をもらいながらやってるんですけど、その代わりすっごい足かせができちゃったんですよ。

Gさん：高齢者介護の事業所で、登録ヘルパーとして働いています。日が浅いので、ヘルパーとして未熟ですが、1年半くらいなんですけど、仕事をさせてもらって。

仕事を覚えて行く過程において感じてるのは、ヘルパーは利用者さんに対して、人として接するべきか、それとも事務的に、こんなロボットとして接するべきなのかというところで、今迷いが出て来ています。

プロって言う肩書きがついた時点ですごくそれを感じてしまったんですけど、時間内で仕事終わらせないといけないっていうところで。だんだん、最初は全然未熟だったんで、時間オーバーして色々怒られる事もあったんですけど。周りの人の話も聞いて、やり方も色々教えてもらって、時間内に終われるように今なって来たんですけど。そこで、利用者さんの話を思い切りまともには聞いていない。右から左に聞き流している。でも事務的な接し方に終始して、自分の気持ち的な負担っていうのは、軽くなった。まともに相手見て喋ってないよね、みたいな。ある意味、自分だんだん冷たくなっていってるよねって。冷酷になっていってるよね、とも感じて。それに、何も思わなくなって来ているということも感じていて。だんだん、仕方

ない、その一言で終わらせている自分も感じて来てて。時間の枠組みの中で、どういう風な姿勢で接して行くべきかというところに、まだまだ自分自身の姿勢としてふっきれていないというのが現状と感じながら仕事をさせてもらってます。

椎名：枠って言葉はすごいキーワードになると思うんですよ。教育の話も福祉の話もそうなんだけど、枠から外れちゃった人に対してフォローしてくのが本来の在り方だったのが、法律があるんだから、枠の中を守れよっていう感じで、結局困っている人を放り込んで行く。もしくはその枠に入らない人は、もう淘汰されてしまうっていう。

Sさん：枠に入った方が管理しやすい。

椎名：そういうことです。それと、実際裏には、福祉っていう予算を削減するために枠にはめた方が楽ということがある。

Gさん：効率がいいかどうかよりかは、ほんまに当人にとってそれがよいふうに働いてるかどうかの方が現場では大事なんですけど、そうは汲んでない人達がつくってるところが嫌やなっていう話。

Nさん：ヨガ教室には、鬱病とか統合失調症の子とかすごくたくさん来てて、私もびっくりしました。生き辛いんやな、と。それでみんな結構よくなる。みんなと、ざっくばらんに、こういう地べたで話ができる訳ですよ。歯医者さんとか、主婦とか、大工さんとか、色んな人がいるんですよ。その中で、人間として裸になって話ができるのがよかったみたいですね。

Tさん：こういう仕事してて思うんですけど、枠組みがあることで、困ってる人がいてもできないことがあって。自分も、次の家行かなあかんとか、施設じゃないから、この家に時間かかったら次の人待ってる。100せなあかんことがあっても、そこはもうプロの勘やけど、今日は8割にしといて、次また2割は巻き戻そうとか。さじ加減があるんですけど、未熟な時とか経験してない時って、それできなくて、次行った人が穴埋めせなあかんとか、すごいストレスがあったりして。同業者同士でストレスぶつけ合いみたいなのもあって、そういうので、仕事してるのしんどくなる。本当は分かり合わなあかんのに、支え合ってるメンバーやねんけど、そういうことは、めっちゃある。

●●●●2010年1月26日（水）
●●●●原口剛：地域再考
●●●●つながりをつむぐ勉強会
●●●●～釜ヶ崎の思想を囲むつどい～

原口：今回は水野阿修羅さんが「日本寄せ場学会通信」の記事と新聞記事を用意してくれているので、この2つを紹介していただこうと思います。新聞は、最近の釜ヶ崎の露店の動向ですね、新聞記事のほうからはじめます。阿修羅さんよろしくお願いします。

水野：新今宮から萩之茶屋の南海線沿いにある露店が2010年1月15日をもって、まあ廃止というか。去年の暮れから警察がまわって1月15日にやめなさいと言っていて、15日どうなるかなと思っていたら、けっこう多くの人がやめて。萩之茶屋の南のほうはしばらくやってたんですが、いまはきれいさっぱり。一昨日あたりからほぼ全滅の状態になって、で警察が10何年ずっと黙認してきたのにいきなりこれだけ取り締まる。いままでは、それなりにみんな抵抗してやってきたのにね、いきなりきれいさっぱりなくなるのは、ちょっと解せない。ということで問題提起だよね。昔は取り締まったらこれで暴動になるんじゃないかと警察も思っていたんだけど、いまはそうならないだろうと。あとまあ、何年か前の天王寺公園でカラオケの屋台が撤去された。あれは何年前でしたかね。

原口：2003年です。だから8年前。

水野：あのときはそれなりにね、ちょっと対決があってね、まあがんばる人もそれなりにいたんだけど。で、みなさんの意見を聞きたくて、この記事をもってきました。

Nさん：噂なんだけど、この前ね、市長が来たという話で。で、そこを見てまわって、それで「ここはひどいなー」って言うたっていう話は聞いたんやけどね。

Aさん：あとはね、24時間やっていた店が何軒かあったということと、自分が知ってる店でもボヤ騒ぎが2回くらいありました。再三の注意を受けながらもまた焚いちゃったりとかあったんで、大がかりな指導があるなっていうことは感じていました。ほかの人がある程度ルール守っていながらも、少数の人のために出て行かざるを得なくなったのかなあと個人的には思っています。

Nさん：このあいだ屋台の撤去あったよね。あのときも結局スムーズにこう一方的に簡単にやられた。行政側もああいうのは見ているんだろうね。抗議もなかったし、トラブルもなかった。

水野さん：三角公園とシェルターのあいだの道路は、昔は露天商がズラーっと並んでた。組合があって、警察に使用許可をもらって、ずっとやってたんですね。ところが新今宮のほうに露店が移っていくなかで三角公園の露店は靴屋さんを除いて全部なくなり、露天商組合もなくなったという経過があります。

原口：いま思い出したんだけど、町会の人たちからのおもしろいアイデアがあります。町会からのまちづくりという提案としてだされたんですけど、旧天王寺線の空き地に天王寺から三角公園にむけて、屋台を再オープンしてもらって屋台村のようなものをつくる。そうすると天王寺から三角公園をむすぶ動線ができる。それで組合をつくってもらって再オープンしたらいいんじゃないかという提案です。

Aさん：だけどね、公園とか金網張って入らせないようにしているとこがあるわけで、結局占拠されたくないからでしょ？行政としても。オープンしている公園もなかにはあるけど、ほかでは鍵かけたり、高いフェンスのとこも多いよね。

原口：管理する大阪市とかはそうだと思います。排除の方だけが先に進んでしまって、その先のこうしたらどうですかっていう提案が進まない。

水野：こういう市は、四天王寺では21、22日にやってるよね。ほかに天王寺駅寄りのどっかでは、古物商の人たちが物々交換する朝市があるね。京都の東寺や北野天満宮とかね、そういうところでは的屋さ

んの親分がしきっていて場所代だせば誰でもはいれるけど、そういう合法的なところは、この周辺では四天王寺しかない。天王寺公園が封鎖される前は、向井さんが反戦露店ということでいろんなもの売っていたね。反原発や反天皇のワッペンや和田喜太郎さんの詩集とかね。向井さんらを締め出すために柵がつくられた。

原口：いまでいうと、ゲリラ的なインフォショップの走りですね。

水野：幟をたててたね。動物園に行く人に向けて。

〇さん：ココルームの前でも週末に、野菜売りに来る兄ちゃんがいたり、花売りなんかもありますが、ぼくは古本市をやりたいと考えてます。

原口：いいですね。

〇さん：道ってのは、人が行きかう場所であって、また門つけがあったり、辻とかは芸能の場でもあったわけだし。道路という公共の場の意味を考えてみたい。

水野：ヨーロッパでもね、朝だけ道路に店だして朝市やってるよね。誰か、いろんなケースを調べてくれたらいいのにね。

●●●●2011年2月26日（土）
尾久土正己：つながりの創造
～えんがわ日和の
えんがわフォーラムより～●●●●

尾久土：いろんな日々の問題解決の何にも役に立たない、「専門家」の尾久土です。2000年ぐらいに、ミュージシャンと一緒に星の話をするっていう、これもなんか自分がやりたかったからやっただけなんですけども。そのうちに、新宿のライブハウスなんかにミュージシャンと行って、「今日の出演者」っていうところに「天文学者・尾久土」となっているというようなこともやりだしまして。

ちょうどそのころに、日本の科学技術の世界で大きな変化がありました。科学コミュニケーションっていう言葉がイギリスから輸入されたんですね。科学コミュニケーション。これはなにかという

と、科学者が偉そうにしていて、難しいことしゃべっていて、何億円も何十億円も何兆円もお金使っていると。わけのわからんことにお金使っていると。税金泥棒やっていう。つまり、これから、たとえば天文学者が宇宙の解決したかったら、予算が欲しければ、納税者の皆さんに還元せなあかんと。それをこれまでの講演会みたいな講義じゃなくて、みなさんと同じ視線に立って、市民とコミュニケーションを始めましょうっていう、科学コミュニケーションっていう文化が入ってきたんです。これはイギリスから始まったんですけれども。

サイエンスカフェっていう言葉をあちこちで聞いていると思うんですけれども、科学者がこういうところで話をするっていうのが流行りだしたんです。ぼくはそれにちょっと違和感を感じたんですね。みんな予算欲しいから、このままだとこどもたちの理科離れがどんどん進んで、新しい後継者が増えないみたいな。どうも自分たちの視点・目線で科学コミュニケーションやっているんだなあって、ずっと思っていたんです。

そんな中、2年ぐらい前に上田さんに誘われて釜ヶ崎に来ませんかって言われたときに、釜ヶ崎で話したり釜ヶ崎で星を見せても、絶対に予算付けへんやろなって思ったんです。予算と関係ないところやろなと思ったときに、こんな解放された場所はライブハウスとよく似ていると。ライブハウスで星の話しても予算つかないんですが、同じように、釜ヶ崎って、そういう国の政策とつながっているとあまり感じなかったので、来てみました。

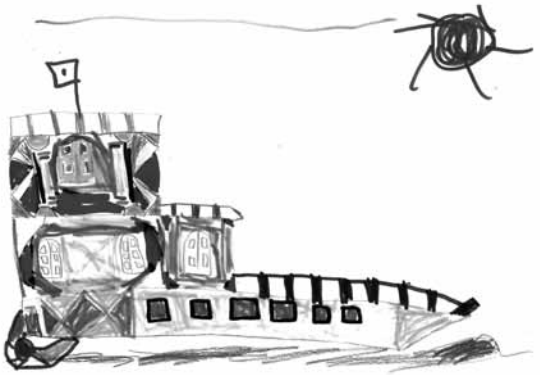
一番最初に、三角公園に望遠鏡を持っていったときに、こんなことを言われました。誰か知りませんが、準備しているときに、「お前らどこのグループや」と、「なにしにきたんや、何の目的できたんや」と。「いや、あの、みなさんと星を見に来たんです。ただの天文学者です」って言ったら、奇妙な顔されまして。

なぜ、ここで星を見ているかって言うと、皆さんと一緒に星を見たいだけなんです。皆さんと一緒に星を見たい、その場所がたまたま三角公園であったり、あるときはどっかの小学校であると。

みなさんあまり普段は空を見ないので気づかないかもしれませんけれども、大阪市内でも、星見えます。望遠鏡使ったらいっぱい星見えるし、目が慣れれば、星座もわかると。

そういうことで、やってみたらですね、みなさん、うれしかったのは、ノリがいい。で、自分も楽しい。みなさんも楽しい。楽しそうな顔をしているのを見たときに、あっ、宇宙って言うのは、お金儲けにはならないんだけれども、人を幸せにするとか、人を元気にする力があるのかなってことを改めて再認識しました。

ライブハウスで感じたことと同じような感じを釜ヶ崎でいま感じていまして、だからみなさんの日頃のいろんな諸問題に答えはもっていません。どうやったら仕事に就けるかとか、そういうことは私は全く専門外ですが、皆さんと一緒に楽しく星を見ましょうという、そういう気持ちで、たぶん今年も来年も再来年も、星を皆さんと一緒に見たいと思いますので、これからもお付き合いよろしくお願いします。



カタストロフのなかで「えん（縁/円）がわ」を思う

―― 承認と受容の場としての相談会

えんがわ日和スタッフ　熊本拓矢

「フクシマ」の原発が「死の灰」を噴出し始める3週間前、中国電力は、山口県上関町田ノ浦の海岸に500人以上の民間警備会社警備員を動員し、原発反対を過去29年間貫いてきた同町祝島住民の抗議を排除することで、原発建設の埋め立て工事を1週間強行しようとした。その初日の2月21日は、午前2時に監視の公安警察が無線機の交信音を闇夜に響かせて浜を囲んで間もなく、電力会社社員と作業員および幾百もの警備員も到着し、それから15時間に渡る座り込みなど種々の抗議が、50人ほどの反対派により始められた。

警備員が広げる遮蔽ネットの隙間に、また警備員の足元に、身を捻じ込んで作業現場へたどり着き資材の上に身を投げ出す。砂浜に打ち込まれる鋼管に腕を足を体を絡ませしがみつく。満ち潮に浸かりながら、鋼管の水没した土台を足で掘り崩す。そのただ中で私が何よりも打ちのめされたのは、民間警備員の大半があどけない表情をした10代や20代の、アルバイターとしか思えない若者たちだったことだ。

地方の若者が職と収入を求めた結果与えられたのは、「瀬戸内」の清浄な海を埋め汚し、その海を糧にしてきた人びとの生活と人生を人知れずうちに葬り去ることで初めて可能になる、核施設建造の最前線」という「短期バイト」。使用者の中国電力社員は姿を一切見せない。不況のどん底に広がるまさに地獄絵が私の目に焼きついた。彼ら彼女らの自尊や尊厳が、あのような「バイト」に携わることでどれほど多く失われるかを思うと、とても辛かった。

「相談事業の中で面会する教師や親たちが自分自身を大切にしていない、自分たちの生き方を自分で受け入れていない、と感じる。そうした大人たちをエンパワメントする必要を感じている。そのためには、こうした場所のように自分を語り、聞いてくれる人がいることが大切。聞きあう、支えあう場所が大事だと思う。」「えんがわ」の講師の1人で、「子ども情報研究センター」事務局長の山下裕子さんの言葉だ。

「えんがわ」のどの回にも共通するメッセージは、私たち一人ひとりの在りようをそのあるがままに承認し尊厳をまもること、だったと感じる。薬物依存者のサポートに取り組む倉田めばさんは、薬物依存からの回復を目指す自助グループのNA（ナルコティクス アノニマス）が合州国で誕生した瞬間、とされる逸話を紹介した。ある一人のアルコール依存の外科医が、断酒を誓っていたものの欲求に耐えきれないために震える手で、緊急手術をしなくてはならない事態に陥った。するとその術前、もう一人のアルコール依存者が彼に1杯のビールを差し出した、というものだ。

これをめばさんは「当事者同士の共感」と表現した。依存を持つ自分を否定するのではなく、依存を抑えられず究極のジレンマに直面し苦しむ自分の在りようをそのままに認め受け入れて貰える一時こそが、回復への一歩を生む。その承認と受容を実行できる他者が、まず何よりも、傍らにいたもう一人の当事者だった、ということだと思う。

2月中旬、「修復的正義」（＊1）の先進地ミネアポリスからシンシア・ラパスさんが来日し、カマヌ（＝カマン！メディアセンター）でワークショップを開いた。家庭や成育環境に困難を持ち、軽犯罪を犯した経験も持つ若者たちと一緒に絵画や工作などのワークショップ＝「修復的正義」をラパスさんは行ってきた。ラパスさん自身もディスレクシア（失読症）を抱えて無数の障壁に直面する中で身につけた「カオスをコントロールする力」が、いまの活動を可能にしているという。この力を「えんがわ」コーディネーターの原田さんは、場を縦横にさばくファシリテーション能力というよりもむしろ、人のつどう場で一人ひとりから心の声を呼び起こさせる力だと思うと話してくれた。

「えんがわ」の「えん」は、軒下の「縁側」にも、車座の「円」にも、「ゆかり・えにし」にも、またのけ者の追いやられる「周縁」にもなる。そこで、言霊のように呼び起こされた心の声に耳を澄ますことで誰もが互いに認め受け入れあう、そのようなつどいを続けたい。なぜなら、そうしたことのすべてを否定して建造される物体がこの瞬間にも、カタストロフを刻一刻と破滅へと向かわせているのだから。

＊1 **修復的正義**：原語はrestorative justice、「修復的司法」と訳される場合も多い。これは、「「修復的正義の先駆的提唱者である」ゼアの説明を借りれば、非行・犯罪の見方やとらえ方を、今までの応報的なレンズから、別の修復的レンズにはめかえてみることである。近代法は、犯罪行為を国家に対する違法とみなし、加害者に刑罰を科す制度だが、一方、修復的司法は、犯罪を人間関係に対する侵害ととらえ、被害者、加害者、影響を受けたコミュニティの三者が関与して、個別具体的に修復を試みる発想および実践である」（坂上香「司法を超える修復的司法の挑戦：教育とアートの現場から」日弁連『自由と正義』2010年9月号所収）。修復的正義では、特に少年司法や教育の現場で、サークル・プロセス（車座で語り合う手法）がよく用いられる。

えんがわに腰かけて、風のることばに耳すます

えんがわ日和
コーディネーター
原田麻以

―― 声を聴きたいと思っていました ――

どうしてそんなに当事者意識があるのですか？と最近質問をされてはっとしたことがありました。

そのときに、その方が言っていたことは、わたしもあなたの取り組みはとても重要だと思うけれど、今の自分の安定したくらしを捨て、釜ヶ崎に入ってＮＰＯで働こうとまでは思えない、と。そしてその方は、わたしを見て、一見普通の若者であるのに、なぜ問題に対してそこまでの当事者意識があるのかわからない、といった風でした。

わたしの当事者意識は一体どこからきているか。思いを巡らせ気付いたことは、わたしはずっと生きづらかったということでした。学校も会社も家庭も地域も、おそらく生きづらかった。そこに横たわる、カテゴリ分けされた「分断」が非常に生きづらくいやなものだったのです。はじめはそのことにも気が付かずにいたように思います。

しかし、いろいろな出会いと経験を重ねるうちにその「分断」と生きづらさの関係について、なんとなく考え出すようになりました。なにより、自分が生きるために、いろいろな人と出会い合う場が必要だと思うようになり、その必要性が自分にとってとても切実だった。自分が生きることに直結する問題だったから、本当にただ事ではなかったのだと思います。安定して保障されたくらしをしたとしても、その分断の解消ができなければ自分は生きよく生きられない。だから、今のはたらき方を選んだのだと整理をしました。自分がもがいてきたように、他の人も出会いや経験を重ねられる場がないと感じるならば、そういった場を開きたいと思うようになりました。当事者意識のある人もない人も関係なく、出会わなければ、経験しなければ、当事者もくそもないではないか、ということが今の活動に至る原点です。

この原点の上にえんがわ事業はあります。わたしはえんがわ事業の当事者です。みなさんと出会い、声を聴きたいと思っていました。

えんがわに腰をかけていると、他人事でないことばがふわりと風にのって耳に入ってきます。この風にのってことばが届く距離感というのは非常に大切だと思います。そして、そこにまずえんがわがあることが重要です。その距離の数値化や、えんがわから起こる費用対効果を話したがる方には、まず腰をかけてもらうことをおすすめしようと思います。えんがわに腰をかけて一緒に話をしてみませんか、と。なにを数値化することに意味があるのか、まずそこから考えませんか、と。

そういうこころもちで会を開いてみて、気付いたことは、誰もが当事者でありえるのだ、ということでした。健康で明るい表情で生き生きと見える人でも、生きづらさを抱えている。一方で、課題を抱えていると言っている人自身がもってきた経験が、聴く者の大きな財産となる。万能のようにみえる講師のみなさんも、迷いながら生きる人生の当事者である。釜ヶ崎特有の課題だと思われていたものが、釜ヶ崎以外のたくさんの人や地域でも同じような問題として起こっていたり、特定の専門分野の課題だと思っていたことが、実はどの分野でも課題として語られていることに気が付いたり。対話からの確かな気づきは、次の行動へのスタート地点に立つことのように思います。そして、つながりの連鎖は、世界を変えてゆく一歩と信じています。

即効性のある相談会ももちろん重要です。ただ、社会に起こる活動には、さまざまな幅があることが大切だと感じます。即効性という点においての評価はむずかしくとも、長い目でみたときに、この事業のもつ意味は小さくないと感じています。

―― 身体感覚としての痛み ――

この道からつながる「えんがわ」の出会いは、なかったものにできない「身体感覚」を震わせ、わたしのものであったかもしれない他者の出来事や「痛み」と向き合うきっかけを与えてくれました。それは、８名の専門家のみなさんをこの場へ呼ぶきっかけでもありました。「身体感覚」として問題をキャッチするという意味に置いて、表現と社会の関わりを模索し、日常的に身体を震わす活動をしてきたわたしたちは、アンテナとしての「身体感覚」とそれに関わる柔軟さという部分でささやかながら仕事ができたのかもしれない、と感じています。

制度や社会がこの「身体感覚」をなきものにしてつくられていくとき、想像だにできない「痛み」を伴う労働や状況さえ大多数の幸福のためにつくられ、多くの場合弱い立場に置かれる人がその痛みを引き受けていきます。出会い、話し、分かち合い、分け持つことでその「痛み」を生み出さずに、ともに生きることのできる社会は可能か、と考えます。簡単にあきらめるのではなく、取り組みを通しさまざまなかたちでその問いについて考え合い、行動を起こしていきたいと思います。

さいごに、不慣れな事務局のなか、誠実に真摯に関わってくださった講師のみなさん、自分の感じたことや考えたこと、過去の経験などを勇気を出してことばにし、この企画をつくりあげてくれた参加者のみなさん、しんどい状況のなか、笑顔で支えてくれたスタッフのみなさん、地域のみなさんに心から感謝いたします。

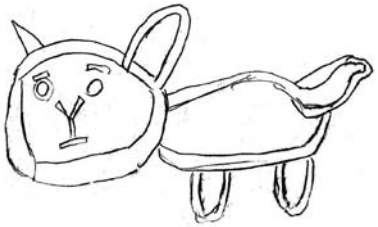
えんがわによせて

でもさ、ちょっとだけ素直になれたらいいとおもうんだ

上田 假奈代

ことばじゃ ないんだな
風が吹いてるんだな
いろんなにおいがするんだな
忘れものを思い出すんだな
幼いころ あそんだことを思い出すんだな
となりに座った人 だれだっけ
まあ いいや
こんにちわ って 言ってみる
喧嘩して飛び出した夕暮れのことを思いだす
ごめんなさい が素直に言えんかった
影がのびた
歳をとった

えんがわの木の節に手をあてて
何度もそこを触りながら
一筋縄には いかないや と思う
だれかが笑った
だれかが怒った
だれかが耳をかたむける
だれかがことばを飲む
だれかがよびかける
こたえたい って思うんだ
ちょっとだけ、素直になりたい
時間は かかるけど
れんしゅうするんだ
昨日のつづきに今日があって
あしたの前に今日があって
となりの人の向こうに
空だって みえる



えんがわ事業データ

■ 勉強会・相談会

2010 年 8 月 18 日（水）19：00 ～ 21：00
えんがわおしゃべり相談会
～支援者って…地域福祉・障害者支援の現場から
講師：椎名保友（パーティ・パーティ職員）
参加者数：12 名

9 月 21 日（火）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会
～薬物依存者になってよかった～私の手渡したいもの
講師：倉田めば（大阪ダルクセンター長）
参加者数：20 名

9 月 25 日（土）18：30 ～ 20：00
つながりをつむぐ勉強会～釜ヶ崎の思想を囲む集い
講師：原口剛（地理学者）
参加者数：15 名

10 月 15 日（金）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会
～薬物依存者になってよかった～私の手渡したいもの
講師：倉田めば（大阪ダルクセンター長）
参加者数：10 名

10 月 20 日（水）18：00 ～ 20：00
つながりをつむぐ勉強会
～栗ごはんをたべながら十三夜のお月さんを見る会
講師：尾久土正己（天文学者）
参加者数：15 名

10 月 29 日（金）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会
～法律もたまには使えるかも…
講師：木原万樹子（木原法律事務所弁護士）
参加者数：10 名

10 月 28 日（木）18：30 ～ 20：00
つながりをつむぐ勉強会～釜ヶ崎の思想を囲む集い
講師：原口剛（地理学者）
参加者数：19 名

11 月 10 日（水）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会～『働きたい』をつなぐ
講師：高見一夫（株式会社ワーク 21 企画代表取締役、A´ワーク創造館館長）
参加者数：9 名

11 月 13 日（土）14：00 ～ 16：00
えんがわおしゃべり相談会
～支援者って…地域福祉・障害者支援の現場から
講師：椎名保友（パーティ・パーティ職員）
参加者数：9 名

11 月 17 日（水）19：00 ～ 21：00
えんがわおしゃべり相談会
～労働問題から恋愛問題まで
講師：伊田広行（ユニオンぼちぼち執行委員）
参加者数：18 名

11 月 18 日（水）18：30 ～ 20：00
つながりをつむぐ勉強会～釜ヶ崎の思想を囲む集い
講師：原口剛（地理学者）
参加者数：15 名

11 月 23 日（火・祝）13：00 ～ 16：00
つながりをつむぐ勉強会
～やさしい天文学！尾久土先生のいる
和歌山大学へ行ってみよう！
講師：尾久土正己（天文学者）
参加者数：7 名

11 月 24 日（水）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会～『働きたい』をつなぐ
講師：高見一夫（株式会社ワーク 21 企画代表取締役、A´ワーク創造館館長）
参加者数：7 名

12 月 3 日（金）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会
～薬物依存者になってよかった～私の手渡したいもの
講師：倉田めば（大阪ダルクセンター長）
参加者数：12 名

12 月 15 日（水）19：00 ～ 21：00
えんがわおしゃべり相談会
～労働問題から恋愛問題まで
講師：伊田広行（ユニオンぼちぼち執行委員）
参加者数：8 名

12 月 17 日（金）18：30 ～ 20：00
えんがわおしゃべり相談会
～法律もたまには使えるかも…
講師：木原万樹子（木原法律事務所弁護士）
参加者数：8 名

12 月 18 日（土）14：00 ～ 16：00
えんがわおしゃべり相談会
～こどももおとなもおじさんもね
講師：山下裕子（子ども情報研究センター事務局長）
　　ほか子ども情報研究センターのみなさん
参加者数：7 名

12 月 30 日（木）18：00 ～ 20：00
つながりをつむぐ勉強会
～冬の星座と、木星をみてみよう
講師：尾久土正己（天文学者）
参加者数：20 名

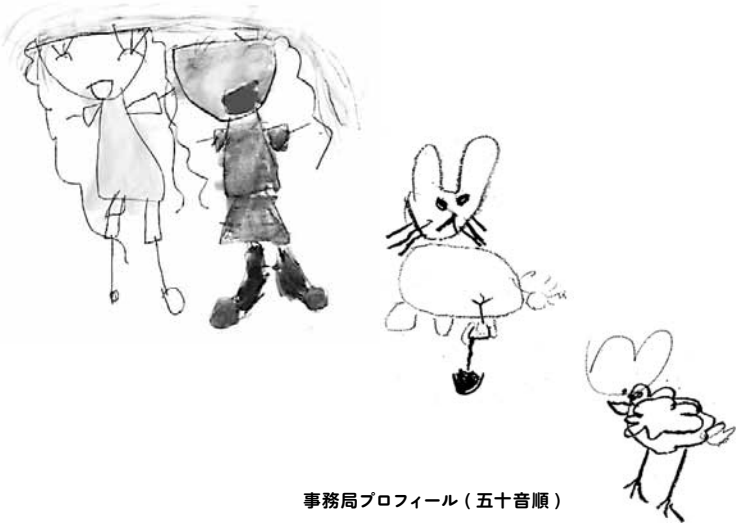
1 月 15 日（土）15：00 ～ 17：00
えんがわおしゃべり相談会
～こどももおとなもおじさんもね
講師：山下裕子（子ども情報研究センター事務局長）
　　ほか子ども情報研究センターのみなさん
参加者数：6 名

1 月 21 日（金）19：00 ～ 21：00
えんがわおしゃべり相談会
～支援者って…地域福祉・障害者支援の現場から
講師：椎名保友（パーティ・パーティ職員）
参加者数：12 名

■ シンポジウム

えんがわ日和のえんがわフォーラム
実施日：2011 年 2 月 26 日（土）
会場：西成プラザ
参加者数：23 名
トーカー：ありむら潜（釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長・西成労働福祉センター職員）、上田假奈代（NPO 法人ココルーム代表）、原田麻以（NPO 法人ココルームスタッフ）
講師：伊田広行（ユニオンぼちぼち執行委員）、尾久土正己（天文学者）、木原万樹子（木原法律事務所弁護士）、倉田めば（大阪ダルクセンター長）、椎名保友（パーティ・パーティ職員）、高見一夫（株式会社ワーク 21 企画代表取締役・A´ワーク創造館館長）、原口剛（地理学者）、山下裕子（子ども情報研究センター 事務局長）

のべ参加者数：262 名



事務局プロフィール（五十音順）

◎上田假奈代（うえだ かなよ）
　NPO 法人ココルーム代表
1969 年生まれ。3 歳より詩作、17 歳から朗読をはじめる。92 年から障がいをもつ人や社会人、子ども対象の詩のワークショップを手がける。01 年「詩業家宣言」を行い、全国で活動をつづける。03 年ココルームをたちあげ「表現と自立と仕事と社会」をテーマにホームレスや高齢者、ニート、教育、環境など社会的な問題にも取り組む。西成区山王で「インフォッショップ・カフェ ココルーム」と「カマン！メディアセンター」を運営。サイト http://www.kanayo-net.com

◎岡本マサヒロ（おかもと まさひろ）
　闘う人類学者・NPO 法人ココルームスタッフ
東京都生まれ。自称・闘う人類学者。釜ヶ崎古書研究会世話人。2010 年より釜ヶ崎エスノグラフィーを書くべくココルームスタッフとなる。最近『ココルーム実験双書 1 釜ヶ崎 暮らしと居場所』をまとめた。

◎熊本 拓矢（くまもと たくや）
　えんがわ日和 スタッフ
1982 年名古屋市生まれ。京都大学総合人間学部卒。同大学院人間・環境学研究科中退。パレスチナ問題について大学で学ぶ。現在、「京都朝鮮学校への街宣差止め等請求訴訟」や山口県上関町祝島の反原発運動にも関心を持っている。ひょんなことから「えんがわ日和」運営にかかわる。

◎原田麻以（はらだ まい）
　NPO 法人ココルームスタッフ
1985 年東京生まれ、東京育ち。明治学院大学卒業後、会社員として勤務。ココルームへ「さまざまな人が集まる場づくり」の勉強へ出向く。2009 年 5 月よりココルームスタッフとなり、「カマン！メディアセンター」立ち上げに参画。同センターディレクター。

◎えんがわ日和　おしゃべり相談会・勉強会　報告書　こんにちわ って 言ってみる

２０１１年４月　発行
編集：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
デザイン：境隆太
写真：原田麻以、安藤久雄
イラスト：カマン！メディアセンターに集うみなさん

◎釜ヶ崎分野横断的ネットワーク事業　えんがわ日和　おしゃべり相談会・勉強会

主催：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
助成：独立行政法人福祉医療機構
協力：大阪市立大学都市研究プラザ

特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

インフォショップ・カフェ ココルーム
大阪市西成区山王1-15-11
tel&fax 06-6636-1612
info@cocoroom.org
http://www.cocoroom.org

カマン！メディアセンター
大阪市西成区太子1-11-6
info@kama-media.org
http://www.kama-media.org

※カマン！メディアセンターの運営・維持、および人件費はトヨタ財団の助成を受けています